

平成 17 年度マスターセンター補助事業

# 山梨県における産業観光の現状と地域ブランド化 調査研究報告書

平成 18 年 1 月

社団法人 中小企業診断協会 山梨県支部

## は じ め に

グローバリズムが進展する国際化の中であって、2003 年に、わが国政府は観光立国実現にむけての『観光立国行動計画』を策定した。これまで国際観光といえば、わたしたちは、海外旅行に出かけるアウトバウンドばかりに関心が向き、外国人を迎い入れるインバウンドに目が行かなかった。観光立国行動計画では、ビジット・ジャパン・キャンペーン等で、外国人旅行者を 2010 年に倍増させる計画である。

観光立国行動計画は、なにも国際観光だけでなく日本の魅力・地域の魅力の確立を謳っている。『一地域一観光』のテーマのもと、観光交流空間モデル事業や体験型観光の推進として『都市と農山漁村の共生・対流』の国民的運動、全国都市再生・構造改革特区との一体推進を目指している。

わが国の高度経済成長期には、国内外を問わず典型的な観光旅行のパターンは、名所見物型のパッケージツアーが主流であった。1990 年代に入ると、わたしたちが旅なれてきたこともあり、画一的に用意されたパッケージツアーから、参加・体験型のカスタマイズな旅を求めるようになった。エコーツーリズムやグリーンツーリズム等が注目され、多様な知的好奇心を駆り立てることが観光ニーズとなってきたのである。

地域産業と観光を結びつける産業観光も、こうした知的好奇心を満たすものであることから、俄かに注目されているところである。産業観光という概念は、近ごろ語られ始めたことであるので、確立した定義はまだないようである。本文 1 章で、この定義について考察を試みている。

本調査・研究事業は、この定義づけを踏まえ、地域商店街の衰退に代表される地方の停滞を食い止め、商業・農林水産業を含め産業の活性化に資する産業観光のあり方を探るものである。観光とは、文字とおり解釈すれば『光を観る』ことであり、その光とは地域に住む人々の生き生きとした暮らし振りと考えてみたい。また、今後わが国では少子高齢化が加速し人口減少カーブを突き進む。地域の振興のうえからも、交流人口を増加させていかなければならない。

2003 年に発表された『観光立国懇談会報告書』の中に、産業観光に関する次のような記述がある。『日本の産業技術のきめの細かさ、確かさは世界が認めるところである。これを実地に見学できる産業観光は、「ためになる楽しさ」を求めるこれからの旅にとって、一つの大きな柱となるはずである。日本の工場は道場だといわれるように、そこにはピンと張り詰めた緊張感があり、人はそこで、日本独特の優れた物づくりの心を知ることができる。産業観光が、日本製品なり日本企業なりに対する信頼感を生む効果は、極めて大きい。魅力は、創り出すものだということに思いを致さなければならない。』

わが山梨県においても、国に倣い観光立県『富士の国やまなし』を掲げている。このビジョンの主要戦略のひとつに『魅力づくりのための産業間や地域間の連携』がある。地域活性化に資する観光立県づくりのために、本報告者がいくらかのお役に立てればと願うのである。

## 目 次

---

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| はじめに                           | 1  |
| 第1章 地域振興を目指す産業観光とは             | 3  |
| 1. 産業観光の定義                     | 3  |
| 2. 地域産業と観光を結びつけた新たな地域活性化について   | 7  |
| 3. 産業観光の事例                     | 10 |
| 4. 産業観光の将来                     | 12 |
| 第2章 山梨県下商工会における産業観光に関する取り組み状況  | 15 |
| 1. アンケート調査の概要                  | 15 |
| 2. 調査票について                     | 15 |
| 3. 調査結果の内容                     | 17 |
| 第3章 県内市町村(商工会地域)にみる産業観光の取り組み事例 | 25 |
| 1. 南アルプス市                      | 25 |
| (1) 南アルプス市の概要                  | 25 |
| (2) 現状と問題点                     | 28 |
| (3) 克服すべき課題                    | 30 |
| 2. 都留市                         | 37 |
| (1) 都留市の概要                     | 37 |
| (2) 現状と問題点                     | 40 |
| (3) 克服すべき課題                    | 44 |
| 3. 身延町                         | 48 |
| (1) 身延町の概要                     | 48 |
| (2) 合併前の旧3町の概要                 | 50 |
| (3) 現状と問題点                     | 52 |
| (4) 克服すべき課題                    | 56 |
| 第4章 地域資源タイプ別産業観光の戦略方向性         | 59 |
| 1. 産業観光の体系                     | 59 |
| 2. 本県モデル(調査研究対象市町)の課題          | 63 |
| 3. 産業観光ビジョンの策定に向けて             | 67 |
| おわりに                           | 70 |

## 第1章 地域振興を目指す産業観光とは……

(産業観光の定義、地域産業と観光を結びつけた新たな地域活性化について)

### 1. 産業観光の定義

最近「産業観光」という言葉をよく聞く。特にはっきりとした定義は、まだないとされているが、交通経済用語辞典では「産業の内容を対象とする観光」と定義されている。

ところで、産業観光はいつごろから使われるようになったのか紐解くと、平成12年に開催された「第1回全国産業観光フォーラム in 愛知・名古屋」を契機に、産業観光の概念が知られるようになった。さらに、翌年の平成13年10月25日・26日の両日に、名古屋市西区の産業技術記念館において「産業観光サミット in 愛知・名古屋」が開催されたのを記念して、10月25日を「産業観光の日」同日を含む1週間を「産業観光週間」とし、関係機関が連携して催事を集中的に行うほか、他地域においても「産業観光の日」、「産業観光週間」としての取り組みを実施するよう呼びかけたのが、急速に普及することとなったのである。

一方、政府の観光立国行動計画においては、産業観光は「産業に関する施設や技術等の資源を用い地域内外の人々の交流を図る観光」として取り扱われている。

「従来の名所、旧跡等の自然、文化、社会等の観光とともに、最近では、産業文化財としての産業遺物、工場遺構、現工場、現産業機器等の農業、工業、サービス業等の施設で行われている生産工程の現場見学や作業体験をとおして、産業文化としての「働く事の尊さ」「もの作りの大切さ」を理解し継承することが社会教育として重要とされている。

このように産業観光が脚光を浴びるようになったのは、経済の流れが大きく変わり、人々の価値観、人生観、世界観がまず変わったこと。物より心を大切にすることになったこと。生き方をスローライフにおきつつあること。ビジュアルの仮想世界から現場、現物、現実を大切にし、社会見学、体験学習を通し、自分の目で確かめたい気持ちが高まったこと。生涯学習とキャリアを高めたい背景が、産業観光という新たな形が生まれてきたのではないと思われる。

#### (1) 産業観光の背景

産業観光の定義がいまだに定まっていな状況下では、この産業観光の理念、概念実現のための経済的、文化的、社会的背景を幅広く検証する必要がある。また、将来産業観光をさらに認知させる定義づけ、体系化を実現するための確認は、重要かつ必要条件であり、今後、産業観光を振興する上でも避けて通ることはできない。

#### 経済と観光

日本は、昭和57年頃から実需に対し仮借が大きく膨らみ、空前とも言われるバブル経済が約10年近く続き、土地や建物、株価、そして絵画等の美術品やゴルフ会員権等が青天井の勢いで上昇が続いた。生活も一点豪華主義の傾向もあって、分不相応の車を買ったり、貴金属を購入

したりする人も多く、国民の多くがこの世の春を謳歌した。

しかし、異常ともいわれた経済状態から「バブル経済とそれ以後の失われた 10 年」といわれ、その後、国民の多くは大きな代償を払うことになり、次第に「物から心」、精神的なものへと重きを変えていった時代である。

観光旅行においては、農協さんご一行様に代表されるように、団体で旅行することが多く、全社的な社員旅行も慰安や親睦を目的に頻繁に行われていた。また、経済のグローバル化に伴ない海外旅行も盛んになりつつあって、正月を海外で迎える人々も多くなっていった時代でもある。

個人生活においては核家族が主流になり、休日にはマイカーで名所、旧跡めぐり、果物狩りをせわしく楽しんでいた時代であり、余裕のある観光旅行とはいえなかった。

こうした時代では「観光産業」はあっても「産業観光」という概念は、ほとんどの人の意識のなかにはなかったが、その実体の一部としては、企業活動の広報・宣伝の一環として相当前から、工場見学、職場見学をしていた。

また、一部の中学校や高校では、修学旅行で自動車工場、新聞社、造船所、電器工場、発電所等を社会見学していた。ただ国民の多くは、バブル経済社会にあって忙しい毎日を、熱にうなされ追いかけられるような生活をし、経済的には多少余裕はあっても、宣伝広告等の情報の氾濫で欲望を刺激され、心の安らげる時代ではなかった。遊びにしても、そこには心の余裕はなく、皆が行くから自分達も出かけないと遅れをとってしまうといった気分が主流で、日帰りのあわただしい旅行が多かった。

その間、バブルがはじけ、日本経済は長く低迷している間、アメリカ経済の回復、EC諸国の拡大化、東南アジア諸国や中国、韓国の成長は著しく、中国は世界の工場として脚光を浴びることとなった。したがって、日本の企業においては、国内だけではなく海外においても、企業間競争は激しく、ますます国際化、グローバル化した。こうした企業戦略の一環として、生産部門を労働力の安い東南アジア諸国や中国にシフトし、その結果、国内の製造関係の空洞化は進み、リストラは一層激しさを増すことになった。中高年のリストラはもちろん、配置転換や賃金カットは多くの企業で行われた。

若年者においても就職はなかなか難しい時代になり、毎年多くのフリーターを生み出してきた。最近では、若者のなかで教育も受けず、就職もせず、訓練も受けない人々。つまり、ニートといわれる若者も多くあらわれてきた。

また、たとえ就職したとしても3年以内に退職してしまう若者が後を切らさない状態で、社会問題化しつつある。就業形態も、正社員、準社員、派遣社員、契約社員、アルバイト、パート等複雑に入り乱れるようになってきており、日本の企業文化も大きく変わった。それは、日本が長年誇ってきた中流階層が、いわゆる、勝組と負組の二極分化されつつあり、富裕層と貧

困層に別れつつあるのが現実だ。

こうした社会問題化している若者達の職場離れに対して、早い時期から社会の現実に触れさせようと、小中学校の総合学習による課外学習や高校の総合学科による積極的な職場見学や体験学習が行われている。

一方、大人たちも、多くの企業でリストラを経験し、今までの会社中心の人生について、ゆっくり考えるようになってきている。つまり、その一つの生活スタイルに「スローライフ」が脚光を浴びている。仕事は、秒進分歩の速いテンポでの生活の毎日だが、少なくとも、個人生活においては、従来の日進月歩で無理せずマイペースで、趣味や学習などを楽しんでいこうとする生き方を志向する人々が増えてきている。

それは、バブル経済社会からの大きな教訓として「物から心へ」「スローライフ」「生涯学習」へとつながり、人生観、価値観、世界観を見直すこととなり、画一的な生き方から、より多様な生き方を模索しはじめた転換期でもある。

#### 物から心へ

日本は、高度経済成長からバブル経済までは、大量生産、大量流通、大量消費が一般の国民の生活スタイルの流れであった。その時代は「消費は美德」という観念が行渡り、物の使い捨ては当り前の時代であった。テレビでのコマーシャル、雑誌による広告宣伝、チラシ、パンフレッド等あらゆる方法で、購買意欲を刺激され、過去2度に渡る三種の神器のダブル攻勢もあって、私たちはそれらを手に入れるために、がむしゃらに働いていた。使い捨てにしても環境問題として多少の危惧はあったものだが、正直考えてはこなかった。しかし、後日水俣病等の公害問題が社会問題として取り上げられるなど、経済一辺倒に対する大きな疑問を感じ、物欲に対する後ろめでたさが彷彿としたものである。

このあたりから、私達がこの地球に生きていくためには、環境が何ものにも代え難いものであることを実感したのである。それは地球温暖化をはじめ、大気汚染、水質汚染、砂漠化、オゾンホール拡大、酸性雨等取り上げたら切りがないくらいの問題を突きつけている。こうした地球規模で不安視されている環境問題の真実を知りたいという欲求が、人間と地球の共生のうえから切実になってきている。これも、人間が本来心の中に持っている安心、安全、安定の切なる希望としての安らぎや癒しを求めているからである。

ここに、従来の観光としての考えも変わり、産業と観光が結びつく原点があるのではないかと思う。まさに、産業観光は、こうした産業社会の状況下において必然的に発生したものと考ええる。

そして、バブル経済がはじけ超低成長経済での国際間の競争が激しくなると、日本の企業は今までの伝統的な終身雇用制、年功序列制を放棄し、リストラを中心に配置転換、賃金カットを果敢に行なってきた。そこで、多くの国民は、今までの会社人間的な生き方に疑問を抱き、

自分自身を見直す契機ともなったもので、人それぞれの価値観、人生観、世界観の変化を互いに容認するものとなった。

それは、基本的には時代の流れとはいっても、意識改革、知識改革、常識改革をトリプルにおこないつつ、自分探しを求めて、自己改革をしていかなければならない時代になったことを示唆している。

また、自己責任時代との風潮のなか、知識陳腐化の速さ、価値の多様化に対応していくためにも自己革新として「自分探し」や「幸せ探し」を考えていくことが、人生そのものの最大のテーマとなってきている。

こうした自分探しが、産業観光においても、本物志向として事実を事実として自分の目で確かめ学ぶことが必要であるからである。

#### スローライフ

私たちは、この世に生を受けてから、時間は一つの価値、評価の一つとして、与えられ考えてきた。さらに、時計の精度が向上し、なお、仕事のほとんどがコンピュータ化され、時間はますます私たちの生活や仕事をしぼり、約束や成果の証とし、人間としての曖昧さを許さないほどの存在となってきている。

一方、時の流れ感覚としては、40、50年前は「10年一昔」といわれ、何ごとにおいても一つの区切りとしてとらえてきたが、ここ10数年前からは「3年一昔」の感覚で生活している感じである。それはそのまま、日進月歩から分進時歩のように、まさに分刻みの社会生活、仕事をこなしていかななくてはならず、勤め人のストレスは大変な精神的圧迫となってきている。こうした緊張した毎日をワンパターンに受けていくと、ノイローゼやうつ病になりやすい人達も多くなり、現実、日本の自殺者数も平成9年の24,391人から平成10年32,863人と急激な増加となり、以後平成16年までの7年間30,000人台を割ってはいない。

このような現実を見るにつけ、社会の急速な変化は私たちの感覚、思考では、今までの価値観、人生観、世界観を修正できないほどの早さであることは間違いないところである。つまり、社会の変化・変革に自己改革がついていけないのが現実である。

そこで、その反動としてではないが、限られた人生、ゆっくりと、マイペースで、若かりし頃できなかった、趣味や学習や体験を楽しんでやっていこうとする思いを大切にしたい気持ちがあがってきたのである。

スローライフは、自己理解の上に立ち自分の意思を大切にすると同時に、奉仕と感謝の気持ちを持ち、体験的学習や行動としての生き方を重視することが必要となってきたのである。

#### 総合学習・総合学科と社会見学

数年前、小中学校では、授業科目の中に総合学科ができて、課外学習として社会見学、体験学習ができるようになった。40年前までは家の前には空地や広場がそれなりにあったが、その

後、高度経済成長のため空地や広場は、公共施設、企業の建物やアパート等になり、外で遊ぶ場所はますます少なくなってきた。両親も共稼ぎする家が増え、鍵っ子といわれる子供が増え、子供達は家の中で、テレビやマンガを見たり、ゲームボーイ、ファミコンで遊ぶ子供が増えてきた。

こうしたなか、子供たちの社会性においては直感的、観念的になり、人との繋がりやコミュニケーションが、上手い出来ない子が増えてきた。そのような反省から、小学生から社会の現実を見学し、仕組や制度を体験学習することで、観念や幻想から、事実、現実として捉え正しい判断ができるようにするためのものである。

一方、高校生や大学生においても、自分の父親が働いている姿を見て育ったわけではなく、職業というものを、やはり観念的にイメージとしてとらえ、いざ就職してみると、想像していたものと大きく違い、せっかく就職しても途中で辞めてしまう学生が多く、就職後3年以内で辞める率は、中学生で約7割、高校生で約5割、大学生で約3割もいるといわれ、これをよく離職の7, 5, 3さんともいわれて社会問題化された。これを避けるために、高校では総合学科が設けられ、希望する職種関係の職場で、学生は現場作業、人間関係を学び職業というものを肌で感じ、観念的なものをより現実のものとして捉え、就職してからのトラブルを事前に避けることを狙ったものである。大学生では、同じようにインターシップ制があり、やはり本就職する前にいろいろと職場体験することが行なわれている。

#### 生涯学習とキャリア

時代の流れの速さ、社会の変化の激しさに、今まで培ってきた価値観、人生観、世界観を維持することができず、また知識、経験も思いのほか早く使えなくなっている。したがって、社会の中で仕事を続けるためには、常に自己啓発、自己開発をしていかなければ、現実に対応できない場合がおきてきた。

また、今は昔と違って通信教育が発達し、衛星通信教育システムとして双方向のやり取りをしながら学習することができる。また、テレビやビデオテープ、CD、DVD等の媒体を使い、いつでもどこでも学ぶことができる機会に恵まれ、30、40年前に比べ教育に対しての時間と空間の高い壁はなくなっている。

一方、インターネットからは、リアルタイムで最新の情報を得ることができる時代になり、学ぶ環境は著しく良くなっている。

これらのことは教育環境において、機会均等の向上を促進させることであり、学ぶ学ばないは本人の意思次第となっており、学歴に関係なく、十分知的実力を身につけることができる状況になってきた。また、学ぶという強い意思が生涯学習の目的と結びつくことによって、職場における業務処理能力を高めることができ、計画されたキャリアプランと結びつけば相互に学習効果を高め、キャリアを積むことができる。

近年、産業観光が取り上げられるようになったのはこのような経済の背景や社会の変化にともなう価値観、人生観、世界観を再構築したい要求と無縁ではない。いまだ産業観光についての理念や概念、そして定義が確立していない現在、産業観光についての社会的背景としての切口、視点から考察することは、決して無駄でないと思う。

## (2)産業観光の分野

産業観光の対象となるものは、第1次産業から第3次産業までのすべての産業が対象になる。第1次産業とは、産業のうち、農業・林業・水産業など直接自然に働きかけるものをいう。第2次産業とは、産業のうち、地下資源をとりだす鉱業と、鉱産物・農林水産物などをさらに二次的に加工する工業をいう。工業には製造業(狭義の工業)と建設業とが含まれる。第3次産業とは、商業・運輸通信業・サービス業など、第1次・第2次産業以外のすべての産業を指す。(広辞苑より)こうした各産業の産業遺跡・遺構の見学や工場現場・同技術の見学・体験学習が産業観光の対象となる。

## 2.地域産業と観光を結びつけた新たな地域活性化について

### (1)地域の魅力の確立

産業観光も、新しい概念としての観光ならば、観光の本質である「光を観る」。つまり光り輝く、素晴らしいものを見て感動し満足することである。そのためには、それぞれの地域においての魅力がなければ見学者、体験者としての観光客は訪れない。わが国では、2003年、観光立国実現にむけて、観光立国行動計画を策定している。

これによると、観光立国行動計画、その 2 で、「一地域一観光」国民運動の展開をあげている。それによると、観光立国を全国民に体感してもらうためには、「一地域一観光」の国民運動を展開し、各地域がそれぞれの持つ魅力を自主的に発見し、高め、競い合って、それぞれに住んでいるところの魅力発見、自己採点をし、この運動をより効果的にすべく施策を国土交通省を中心に各省庁ですでに実施している。

以下、主要項目を参考まで紹介する。

#### 「一地域一観光」国民運動の展開

- 1) 地域の魅力の発見、理解、再評価
- 2) 地域の魅力の発見、理解のための休暇取得の促進
- 3) 地方における「一地域一観光」運動体制の整備

#### 地域の輝く個性を発揮する、「一地域一観光」の推進

- 1) 「一地域一観光」に磨きを掛ける良好な景観の維持、向上、創造
  - a. 「美しい国づくり」の推進
  - b. 身の回りの良好な景観形成
- 2) 魅力あるまちづくり・むらづくりの取り組み支援

a. 地域自らの取り組みの総合的支援

[ ハード・ソフトの総合的支援 ]

[ 人材育成 ]

[ 表彰・イベント等 ]

[ 食を通じた一地域一観光支援 ]

[ 一地域一観光に関する企画づくり支援 ]

[ 都市再生に向けた取り組み ]

[ 構造改革特区における一地域一観光 ]

b. 魅力あるまち、むらを演出する良好な空間の形成支援

[ まち ][ 水辺・海辺 ][ 田園 ][ 森林 ]

3) 一地域一観光のネットワーク化

以上、地域の魅力アップの主な施策の項目を紹介したが、国も地域の魅力確立のため、積極的に施策を実施している。これに遅れをとることなく時代の流れにのって、地域の魅力再発見のため地域の関係機関一体となって協力し、展開していかなければならない。

特に、この一環として、重要なのは産業観光の見直し掘り起こしを一緒に行っていくことが大切である。

(2) 産業観光の効果

産業観光は、従来の名所、旧跡の高見の見物から、私達の生活の基盤となっている各種産業の現実としての現場、内容を見学、学習、体験することによって、ものづくりの大切さ、働くことの尊さを体得することは、資源のない日本にとって重要であり、知識の確認と定着といううえでも効果がある。

産業観光は、通常の観光ほど経済効果は小さいかも知れないが、観光する人々が、問題意識を持って工場見学、体験学習するということは、技術立国として生存していかなければならない日本にとって、多様な波及効果があると考え整理すると5つの活性化が考えられる。

(3) 地域産業と地域活性化

地域の活性化

地場産業は一般的にみて、東南アジアからの安い製品輸入により、全国的に衰退気味で活気がないのが実情である。加えて商店街も歯の抜けたようにシャッターの閉まったままのところも多く、見るからに活気が見当たらない。そんななか、町の名所、旧跡はもとより産業観光の資源となる産業遺物や地場産業そのものや、その工芸品を掘り起こし、工場見学や体験学習を通じて集客し、地域ブランドとして発信できる仕組みがつけられる可能性が高く効果があると考えられる。

### 観光の活性化

これからの観光は、少子高齢化をベースに考えなければならない。ましてや 2007 年問題としては、いよいよ団塊の世代が定年を迎え、第二の人生へ入ってくる。また、大学の定員と応募者がイコールになる年でもあり、また、離婚における年金の分与から離婚も増えると予想する人もいて、社会が大きく変わる転換点となりうる。特に、団塊の世代の人たちのニーズを無視して、これからの観光の振興および活性化はありえない。これらの世代の人たちは、日本の高度経済成長のために自己や家族を犠牲にして働いてきた人たちで、若かりし頃趣味としてやりたかったこと、学びたかったこと、旅行に行ってみたかったことを実現したいと考えている人たちである。この団塊の人たちをはじめ高齢者が望む楽しみは観光旅行である。この観光旅行に趣味、学びが結びつけば、つまり、産業観光となるのである。そして、常に心に懐かしさのなかに、安らぎや癒しを求めている世代である。加えて、激しい社会変革のなか意識改革を強く感じてきた人たちでもある。

こうした中高年者の楽しみ方のひとつは観光旅行をすることである。現実なもの、真実なものを学ぶことを喜びとすることである。ここに、観光を活性化するマーケットが存在している。

産業観光は、この人たちのためにも、町全体の観光資源を見直すことが大切である。公共施設としての公園、博物館、資料館や温泉・保養地、自然・文化・歴史などの観光資源に、産業遺跡や農業・工場施設の見学、体験学習などの産業観光資源を見つけ出していくことが重要となってくる。

そして、これらの観光資源を有機的に結び付け、ワンストップトラベルを行うメニューができれば、滞在型観光取込客数も増え、地域全体の活性化につながるものである。

### 文化の活性化

従来の観光資源のほか産業観光資源の掘り起こしを通じて、町の文化を見直し大切にしていこうとする気運が町民の中から次第に盛り上がってくる。特に、産業観光資源としての伝統的工芸品・工業製品や産業技術が地域の文化として再認識され、定着発展する可能性が考えられる。

このことは、地場産業をさらに高め、地域の文化として保存育成し継承することが大切であり、文化活性化にも役たつものと考えられる。

### 産業の活性化

産業観光ができる地域では、観光客が工場見学、体験学習することによって、伝統的な工芸品を自ら作って製品にし、それを使用するという満足感は大変大きいものといえる。その人たちが、同好会のかたちで会員になり、定例的に会いりピーターとして活躍すれば、産業観光の担い手として広く口コミで紹介される可能性がある。

また、産業観光資源の掘り起こしの中にあって、公共機関との連携や業種間の交流が活発に

なり、新しいアイデアを取り入れた工芸品や新製品が生まれてくる可能性もあり、各業種間の情報交換を通じて互いに活性化され、地域ブランドとして全国に発信できる可能性がある。

一方、都会の人の中には、毎日の喧騒とした生活に疲れ、地方の農村に癒しを求めて定住し田舎暮らしをする人たちがいる。しかし、田舎で暮らすことは何かと問題も多く、過疎化する地域において町が産業観光で活性化し、田舎暮らしをする人たちにおいても生活のため、地元の企業に就職したりすることで、地域の産業がますます活性化することになる。

#### 教育の活性化

地場産業が産業観光資源として見直され、町ぐるみで育成発展させようとして協力すれば地元産業への関心が高まり、後継者問題の解決や育成に大きな力になりうる。また、地元の小中高生が、総合学習や総合学科のなか工場見学や体験実習をすることによって、もの作りとしての工程を知り、働くことの意味や尊さを学ぶことは重要であり、ひいては、将来職業選択において適職かどうかの判断をつけやすくなり、現在、問題となっているフリーターやニート対策にもなりうる。

#### (4)産業観光の推進

産業観光は、地域の活性化や活気ある町づくりのため、また、若者の理系離れを防ぐためにも、地域自体が中心になって産業遺産をはじめ地場産業、技術、人材などを掘り起こし、データベース化し、それらを活かす仕組みを地域全体が主体的に考えなければならない。

そこで、地域が自主的に行動するにしても、産業観光を効率的に推進するため、関連する周囲の協力は欠かすことはできない。各種産業団体、商工会、行政、学術機関、NPO団体、ボランティア団体、技術者OBなど各種団体や機関が連携し、あらゆる支援ができる体制をつくることが産業観光を成功させるポイントとなる。

そして、産業観光が活発になればその波及効果は観光産業にとどまらず、地域経済全体への効果となって、人材育成、新製品の開発、技術の向上など地域ブランドとして発信力も高めていくことも期待できる。

とにかく、産業観光の推進は地域の活性化のため、地域が一体となって、各団体、各機関が協力し、真剣に、ものづくりの大切さ、働くことの意味や尊さを若者達に継承としていくことは、大人たちの重要な責務である。

### 3.産業観光の事例

産業観光の事例は、全国の先進地区ではいろいろな形で紹介されはじめている。例えば、財団法人社会経済生産性本部と社団法人日本観光協会から出されている事例集 1 地域資源を活用した産業観光モデルとして、事例 20 が紹介されている。

#### 小樽運河と手作り体験（北海道小樽市）

運河を生かしたまちなみづくりと、地域に根差した職人技を味わい、体験も可能な事例。

鉄とガラスのモダニズム工場（北海道室蘭市）

モダニズム工場の近代建築物と町中の歴史的建物を一体的に活用して産業観光を進めようとしている事例。

日本最古級の木造芝居小屋・康楽館（秋田県小坂町）

老朽化した旧鉱山事務所や芝居小屋を修復、動態保存でまちづくりの核に据えた事例。

伝統的織物と鋸屋根のまちなみ（群馬県桐生市）

体験とまちなみ観光で、江戸時代からの伝統的織物を総合的に楽しめる事例。

鉄道遺産を活用したまちづくり（群馬県松井田町）

碓氷峠の鉄道遺産を核に、自然資源を融合し、鉄道愛好者から一般レジャー客にまで対応できるよう観光資源化した事例。

織物産業と足利学校・鏝阿寺（栃木県足利市）

織物産業、鋸屋根の工場などの近代化遺産と中世からの歴史遺産を活用するまちづくりの事例。

港湾の京浜臨海部（神奈川京浜臨海部）

京浜臨海部の運河や工場、産業遺産、企業博物館などを観光資源として編集。

楽器やオートバイなど身近なものづくり現場を魅せる（静岡県浜松町）

楽器、オートバイ、化粧品など、身近な産業製品や工程をテーマに沿って見学できる産業観光の事例。

産業技術中枢圏域としての大きな産業集積（名古屋市を含む中部圏）

伝統産業から現代のリーディング産業、未来産業まで多様な産業集積とその博物館等をネットワーク化した産業観光の事例

酢の里・酒の文化館・旧カブトビール（愛知県半田市）

生活に密着した味覚のミュージアムを活用した中部圏の代表的な産業観光事例。

ぶどうとワインでテーマ性のある観光地づくり（山梨県勝沼町）

ぶどうとワインをテーマに、文化、景観、食を味わい、通過型から滞在型観光への転身を試みる事例。

「蚕都」の歴史的まちなみの再生（長野県上田市）

全国トップクラスの蚕糸業の遺産と歴史的まちなみや景観を活かしたフィルムコミッション事業を進める事例。

読書発電所・桃介橋（長野県南木曾町）

近代化遺産「読書発電所」「桃介橋」と妻籠宿などの地域資源を連携した新たな観光地づくりの事例。

琵琶湖疎水と蹴上発電所・インクライン（琵琶湖疎水）

京都の原点ともいえる琵琶湖疎水を巡りながら、電力・水道インフラの歴史の体験学習ができる事例。

赤煉瓦造建造群の活用（京都府舞鶴市）

日本有数の煉瓦造建造物群のまちなみ整備と観光振興の事例。

鉄の道文化圏（島根県奥出雲地域）

たたら製鉄の産地を広域でネットワークして観光化を図った「鉄の道文化圏」

世界遺産登録を目指す石見銀山（島根県太田市）

銀山の繁栄時代を彷彿させる遺跡と伝統的まちなみ整備によって世界遺産登録をめざす事例。

知の博物館都市づくり（愛媛県新居浜市）

別子銅山の近代化産業遺産を活用した産業遺産観光の先駆け事例。

門司港レトロ（福岡県北九州市門司区）

歴史的港湾の建造物や港湾施設を活かした新しい景観とまちなみづくりによる都市型観光の事例。

近代工業の発祥地を産業観光拠点に（鹿児島県鹿児島市・大口市）

近代工場集積第1号・尚古集成館と日本の電気化学発祥の旧曾木発電所などを活用した広域的な産業観光を推進する事例など。

産業観光の対象としての産業や都市発展の類型は実に多様で、それぞれの都市における産業資源の内容は大きく異なっている。観光資源（コンテンツ）が異なれば、その活用方法も自ずから異なる。そこで本事例集では、こうした産業・都市の発展類型を下記のように設定し、それぞれの類型の中から典型的と思われる事例を抽出して整理している。

今回取り上げた事例は、過去の産業観光フォーラム開催地域をはじめ、観光面で力を入れている地域であるが、選定は必ずしも明確な基準に基づくものではない。今後、観光としてのポテンシャルの評価を踏まえ、対象地の調査を進め、その都度、事例を追加して体系化を図っていきたい。そのような性格のものとして、本事例は紹介されている。

| 産業・都市類型           | 資源の基本コンテンツ                                                       | 典型地域                                                                    |
|-------------------|------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 類 鉱山都市型           | 坑道、軌道（鉱山鉄道）、索道、精錬所、選鉱所、貯鉱庫、鉱山事務所、高層煙突、山神社、社宅、企業病院、学校、芝居小屋、共同風呂など | 小坂（秋田）「事例 3」<br>大田（島根）「事例 17」<br>奥出雲（島根）「事例 16」<br>新居浜（愛媛）「事例 18」       |
| 類 内陸繊維都市型         | 蚕種、蚕室、蔵、製糸場、ノギリ屋根、路地、食・文化、ファッション、織姫神社など                          | 足利（栃木）「事例 6」<br>桐生（群馬）「事例 4」<br>上田（長野）「事例 12」                           |
| 類 電源地域型           | 発電所、ヘッドタンク、水路橋、橋梁、河川、ダムなど                                        | 読書発電所（長野南木曾町）「事例 13」<br>旧曾木曾発電所（鹿児島）「事例 20」                             |
| 類 港湾都市型           | 運河、港湾事務所、税関、船留まり、赤煉瓦や石造の古い倉庫・銀行建物、臨海立地型の工場群など                    | 小樽（北海道）「事例 1」、室蘭（北海道）「事例 2」、京浜臨海（神奈川）「事例 7」、舞鶴（京都）「事例 15」、門司（福岡）「事例 19」 |
| 類 大消費地型（フルセット産業型） | 多様な産業と都市インフラの集積、企業博物館・ミュージアムなど                                   | 名古屋（愛知）「事例 9」<br>浜松（静岡）「事例 8」<br>北九州（福岡）「事例 19」                         |
| 類 田園地域型           | 水車、蚕室づくりの建物、棚田など<br>農村景観、陶器、瓦、和蠟燭、和紙、酒、味噌、醤油、酢など                 | 勝沼（山梨）「事例 11」<br>半田ほか知多半島（愛知）「事例 10」                                    |
| 類 その他の類型          | 上記の特定の類型には必ずしも区分できないもの                                           | 碓氷峠（群馬）「事例 5」<br>琵琶湖疎水（京都）「事例 14」<br>尚古集成館（鹿児島）「事例 20」                  |

#### 4. 産業観光の将来

産業観光の将来を考えることは、もとより難しいことですが、今まで述べてきたことを考えあわせると、産業観光は、これからの個人や家族における体験学習観光旅行として、ますます重みを増すと思う。それをもう一度まとめる事によって、今後の産業観光振興の計画や遂行の背景になればと考える。

社会に生涯学習が定着し、行政も、教育機関も本腰になってきていること。

物質的な興味から精神的興味に変わりつつあること。

頭だけの学習から総合学習・総合学科やインターシップ等実体験が重視されはじめたこと。

職場において、業務遂行上、常にキャリアアップをしていかなければならなくなったこと。

虚偽の多くなった社会において、本物志向を求める傾向になってきたこと。

スローライフを志す人たちが増え、マイペースで生きる人が多くなったこと。

思考論理から、体験学習を好む傾向にあること。

団塊の世代が定年に達し、彼らの技術・技能が産業観光の案内役になれること。

懐かしさ等回顧的傾向が社会にあり、癒しや安らぎを求めていく人が多くなること。

などが考えられ、産業観光は生涯学習の一環としても、現場への社会見学・社会実習をとおして、魅力のある分野として発展していくものと考え。（百聞は一見にしかず）

## 第2章 山梨県下商工会における産業観光に関する取組み状況

### - 山梨県商工会連合会とともに実施したアンケート調査結果から -

われわれ山梨県支部が、本調査・研究事業を実施するに当たり、時を同じくして山梨県商工会連合会でも観光部会をととして、産業観光に関する振興事業に取り組みたいとの情報が寄せられた。そこで、山梨県における産業観光の実情をまずは把握するため、当連合会をととして山梨県下各商工会からアンケート調査を行った。

#### 1. アンケート調査概要

##### (1) 調査目的

山梨県各地域(市町村単位)の従来的観光と産業面の実態を明らかにし、地域活性化に資する新しい考え方である産業観光に取り組む意向を把握するものである。

##### (2) 調査実施期間 平成17年11月中旬～12月中旬

##### (3) 被調査者 山梨県下31商工会

##### (4) 調査票回収状況 27商工会(回収率87%)

#### 2. 調査票について

被調査者にとって産業観光という言葉は、初めて聞く者が多いと思われることから、まずは産業観光の概念を簡単に紹介し、次のような14にわたる質問をした。

-----  
多くの質問は、自由回答形式になっておりますのでお願いします。

質問1 貴会地域における従来的(自然・名所旧跡等)観光資源をあげてください。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問2 貴会地域における地場産業がありましたら、あげてください。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問3．貴会地域における歴史的「産業遺産・遺跡」がありましたら、あげてください。

（産業遺産・遺跡とは、例えば小樽運河や四国新居浜市の別子銅山など）

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問4．貴会地域における現在の主な産業はなんですか。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問5．貴会地域における新技術・先端技術関連の工場はありますか。ありましたら、その概要を記入してください。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問6．貴会地域の企業で、工場見学を実施しているところがありますか。ありましたら、企業名を記入してください。

（ 企業名 \_\_\_\_\_ ）

質問7．貴会地域で、伝統工芸あるいはクラフト関係で活躍している事業所はありますか。ありましたら、その概要を記入してください。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問8．上記事業所の工房で見学や体験はできますか。どちらかに○印をつけてください。

1 できる                      2 できない

質問9．貴会地域における特産品はなんですか。その概要を記入ください。

|                         |
|-------------------------|
| -----<br>-----<br>----- |
|-------------------------|

質問 10 . 貴会地域における第一次産業での特産物はなんですか。

|       |
|-------|
| ----- |
| ----- |
| ----- |

質問 11 . 貴会地域におけるまちづくりテーマ（行政の施策方針等）はなんですか。

|       |
|-------|
| ----- |
| ----- |
| ----- |

質問 12 . 貴会は、観光振興事業に力を入れて行きたいとお考えですか。

- 1 力を入れて行きたい                      2 あまり考えていない

質問 13 . 貴会は、産業観光に取り組んで行きたいと思いますか。

- 1 取り組んで行きたい                      2 あまり考えていない

質問 14 . 最後に、産業観光振興に対する貴会の考え・感想をお聞かせください。

|       |
|-------|
| ----- |
| ----- |
| ----- |

ご協力ありがとうございました。

貴会名（                                              商工会）

担当者（                                              ）

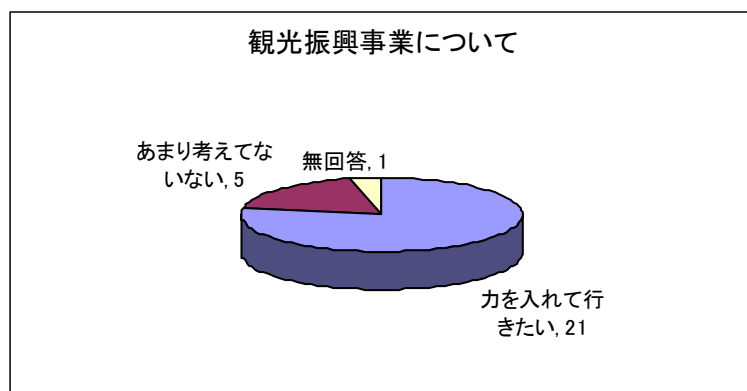
-----

### 3. 調査結果の内容

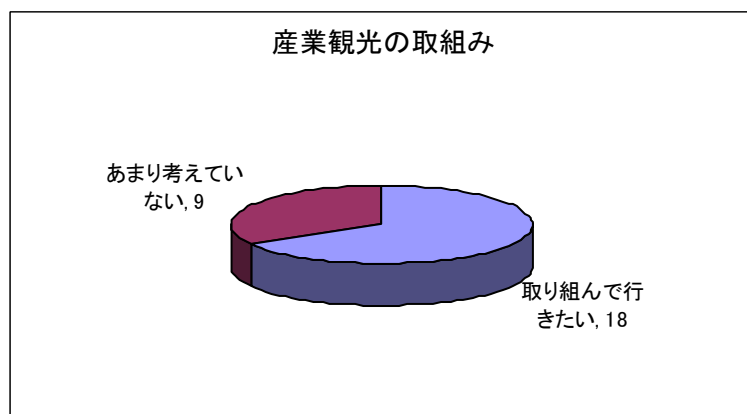
県下 31 商工会のうち、4 商工会が回答を寄せてくれなかった。おそらく、当該地域は観光地ではないと判断し、産業観光事業には関係ないものと考えたものと思われる。

質問内容は上記の調査票のとおりであるが、当調査の目的は産業観光に対する具体的取組みを尋ねるものであるので、主に自由回答形式にした。よって、統計的に分析することはできない。一部には、定量的分析が可能であるので、これらの結果から見ていくことにする。

(1)質問 12「観光振興事業」、13「産業観光への取組み」について

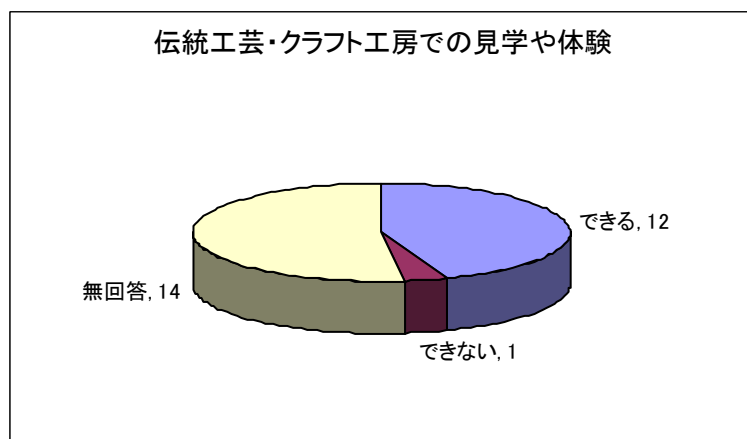


回答をいただいた 27 商工会のうち、『力を入れて行きたい』と答えた商工会が 21 で、消極的な返答は 5 商工会であった。



産業観光については、これまでの観光事業の取り組みに対する意識と比べ、少々低いものと思われる。『あまり考えていない』が 9 回答と多くなったことは、産業観光のイメージが明確に描けないことによるものかも知れない。

(2)質問 8「伝統工芸、クラフト工房での見学や体験」について



質問 7 の伝統工芸、クラフト関係で活躍している事業所の有無により、回答数が 13 と少なかった。そのうち、『できる』との回答が 12 であった。

(3)これまでの一般的観光に関しての観光資源

質問 1 では、従来の(自然・名所旧跡等)観光資源の主なものを挙げてもらったが、山梨県らしく山岳・渓谷の他、武田信玄公ゆかりの神社仏閣、温泉郷が目立ったものであった。全国的に有数な観光地である河口湖商工会では、自然景観面ばかりでなく美術・博物館やレジャー観光での遊園地を挙げている。六郷町、田富玉穂二商工会は空欄であることから、自然・名所旧跡等の観

光資源に乏しく、観光地ではないという認識であろうか。

#### (4)地場産業について

質問 2 の地場産業を見ると、14 商工会が具体的な産業を挙げてくれた。残り約半数の 13 商工会は、当該地域には地場産業が存在しないと判断している。主なところは、全国的に有名なワインが 3 商工会、印章が 2 商工会、本県で有名な地場産業である和紙が 2 商工会、郡内織物が 4 商工会であった。また、笛吹市商工会はワインの他、温泉産業を挙げている。中には、新たに地場産業を育てようとしている商工会がある。道志村商工会の農業分野であるがクレソン栽培は、同商工会の意欲を感じさせるものである。

#### (5)産業遺産・遺跡

質問 3 の歴史的「産業遺産・遺跡」については、8 商工会が答えてくれている。約 3 割の回答結果である。具体的には、富士川舟運(鯉沢町、増穂町商工会)、湯の奥金山(身延町商工会)、信玄公史跡である将棋頭・石積出し、信玄公治水事業(南アルプス市商工会)、水晶発掘跡、東京電力鹿留・谷村発電所(都留市商工会)、製糸業模範社跡(甲斐市)、三分一湧水(北杜市商工会)等である。

#### (6)現在の主な産業

質問 4 は現在の主な産業を聞いた。『特別なし』あるいは空欄であるのが 5 商工会あった。答えてくれた商工会のうち、複数の業種をあげたところかなりあった。最も多かったのが、観光業と農業の 8 商工会。下記に、答えてくれた産業を一覧にする。

|                |       |
|----------------|-------|
| 観光業（温泉、宿泊業等）   | 8 商工会 |
| 商業（主に小売業）      | 5 "   |
| 土木・建築業         | 3 "   |
| 農業（主に果樹）       | 3 "   |
| 和紙製造業          | 1 "   |
| 樹脂製品製造業        | 2 "   |
| 印章製造販売業        | 1 "   |
| 織物製造業          | 1 "   |
| ミネラルウォーター製造販売業 | 1 "   |
| ワイン製造業         | 1 "   |
| 木材業            | 1 "   |
| 電機・機械関係製造業     | 4 "   |

(7)新技術・先端技術関連工場の存在

質問 5 では新技術・先端技術関連の工場があれば、その概要を答えてもらった。10 商工会が具体的に次のような内容を記入してくれた。

|           |                    |
|-----------|--------------------|
| 南アルプス市商工会 | 半導体、ＬＥＤ、ＤＶＤ関係 6 工場 |
| 南都留中部商工会  | F A、ロボット           |
| 塩山市商工会    | 花卉バイオ              |
| 山梨市商工会    | 電子機器               |
| 昭和町商工会    | ロボット、半導体、医療器、自動車部品 |
| 都留市商工会    | コピー機               |
| 甲斐市商工会    | 光造形装置              |
| 増穂町商工会    | 光学機器等              |
| 笛吹市商工会    | コンピュータソフト開発        |
| 北杜市商工会    | 真空技術、フォトマスク原版加工    |

南アルプス市商工会は甲西工業団地等、昭和町商工会では国母工業団地と釜無工業団地を抱えていることから、複数の技術と事業所を紹介してくれた。

(8)工場見学を実施している企業

質問 6 では、工場見学を実施している企業名を挙げてもらった。8 商工会が工場見学を実施している事業所を答えてくれた。

|         |                   |
|---------|-------------------|
| 市川商工会   | マルアイ、豊川製紙         |
| 山梨市商工会  | サントネージュワイン        |
| 大月市商工会  | 笹一酒造              |
| 甲斐市商工会  | サントリーワイナリー、シャトレーズ |
| 勝沼大和商工会 | 勝沼町にあるワイナリーのほとんど  |
| 増穂町商工会  | はくばく              |
| 笛吹市商工会  | 多くのワイナリー          |
| 北杜市商工会  | ミラプロ、ＨＯＹＡ長坂工場     |

ワイナリーは山梨県の地場産業であり、国中東部地域の複数の市町村に存在しており、以前より産業観光のメッカと言われるもので、正しく大人の社会科見学を実施してきた実績がある。ことに勝沼町は全国的に産業観光地として採り上げられている。

(9)伝統工芸・クラフト関係の事業所

質問 7 は、伝統工芸・クラフト関係で活躍している事業所を挙げてもらい、その概要について述べてもらっている。13 商工会が当該事業所を挙げ内容を記している。

| 商工会       | 事業所等の概要                                                                | 見学・体験の可否 |
|-----------|------------------------------------------------------------------------|----------|
| 河口湖商工会    | 大石紬伝統工芸館(大石紬の機械織実演・体験)<br>河口湖自然生活館(ブルーベリー作り教室)<br>河口湖クラフトパーク(吹きガラス等)など | できる      |
| 笛吹市商工会    | 山梨伝統産業会館(宝石・水晶・印章・和紙・硯・印<br>伝等山梨県の 12 種類の伝統工芸品の展示、体験)                  | できる      |
| 身延町商工会    | 富士川クラフトパーク(西島和紙工房の他、印章、陶<br>芸、吹きガラス等)                                  | できる      |
| 鯉沢町商工会    | 雨端硯本舗                                                                  | できる      |
| 早川町商工会    | 木工民芸品、陶芸                                                               | できる      |
| 南アルプス市商工会 | 井上染物店(藍染)、若草まちおこし協同組合(鬼面瓦)                                             | できる      |
| 六郷町商工会    | 六郷町印章業連合組合(印章篆刻)                                                       | できる      |
| 大月市商工会    | 手織物                                                                    | できる      |
| 西桂町商工会    | 甲斐絹                                                                    | できない     |
| 北杜市商工会    | 鉄の造形、陶芸、ガラス工芸                                                          | できる      |
| 甲斐市商工会    | ノースランドキャンパーズビレッジ<br>(皮クラフト、陶芸)                                         | できる      |
| 増穂町商工会    | 増穂登り窯(池田満寿夫八方窯等)                                                       | できる      |
| 南部町商工会    | ログクラフト(ログハウス)                                                          | できる      |

(10)特産品について

質問 9 では、当該地域での特産品を聞いた。3 商工会以外は、当該地域固有のモノや商工会で開発した特産品を挙げてもらった。挙げてもらった特産品を一覧に記す。

|        |                                                  |
|--------|--------------------------------------------------|
| 農産物    | ぶどう・桃等果物、高原野菜、茶など                                |
| 加工食品等  | ワイン、漬物、菓子、こんにゃく、味噌、手づくりハム、ジャム<br>ミネラルウォーター、お土産菓子 |
| 伝統工芸関連 | 雨畑硯、印章、和紙、鬼面瓦、織物、木工品、版画(名取春仙美術館に因んで)             |

(11)第一次産業における特産物

質問 10 は、第一次産業での特産物を尋ねた。当然のこととして、上記の質問で農産物を挙げた商工会では重複する答えになっている。具体的には、知名度の高い「曙大豆」「ウコン」「八幡芋」

「甲州小梅」「武川米」「花まめ」「浅尾大根」等があり、中にはブランド化しつつあるものがある。

4 商工会では、『特に特産物はない』あるいは空欄であった。

#### (12) まちづくりテーマ(行政の施策方針等)

質問 11 では、行政の施策方針等による「まちづくりのテーマ」について尋ねた。答えを寄せてくれなかった商工会が 4 会あった。合併を控えて協議中のところが 1 商工会。合併を果たして新たなまちづくりを目指しての決意を表しているところもある。

多くの商工会の答えとして、市町村こそ違い、ありふれた美辞麗句に包まれた金太郎飴的テーマである。そうした中で、具体的イメージあるいは産業観光にふれているテーマを記す。

|                                      |           |
|--------------------------------------|-----------|
| 富士川舟運のまち鯉沢                           | 鯉沢町       |
| 交流人口の増大                              | 小菅村       |
| 日本上流文化圏構想                            | 早川町       |
| 観光振興と南アルプスブランドづくり                    | 南アルプス市    |
| 全村公園化構想                              | 山中湖村      |
| 「フルーツ・コミュニケーション・シティ」の実現を目指して         | 山梨市       |
| 果樹園交流都市                              | 勝沼町(新甲州市) |
| 農林業の参画した観光を中心としたまちづくり                | 道志村       |
| 歴史と文化に彩られた果実と温泉のまちをテーマに<br>観光及び産業の振興 | 笛吹市       |

#### (13) 産業観光振興に関する考え・感想

最後の質問では、産業観光の振興に対する考えや感想を商工会に聞いてみた。18 商工会がすでに取り組みを進めている状況や今後実施していきたいとの考え、あるいは当該商工会が抱えている課題、また産業観光に変わる地域振興の意見等を書いていただいた。18 商工会の考え・感想を紹介する。なお、長文にわたる答えは、勝手ながら考えの趣旨をまとめさせてもらった。

|                                                                             |
|-----------------------------------------------------------------------------|
| 合併を機に当市では、観光交流施設の整備等へ取り組み始めたので、商工会でもタイアップし観光振興に取り組みたい。                      |
| 各市町村が特徴ある地域・まちづくりを進めるのであれば、敢えて産業観光と言う一括りで考える必要がないのでは？当商工会では、別の切り口で産業振興を模索中。 |
| 観光地でない当会にとっては、集客施設整備、交通手段など課題が多く、取り組みにくい事業と言えます。                            |
| 限られた地域では、観光流入人口がもたらす経済効果は大きい。地域活性化につながるものだと考える。                             |
| 当市に残された唯一の可能性のある分野として位置づけ、すでに取り組んでいる。                                       |

|                                                                                               |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 横浜市との関係から、総合学習の一環とした「自然体験学習」をこれからも観光振興の中心にすえ、地域を巻き込んだ事業展開を図っていく。                              |
| 歴史的な建造物等を文化遺産として保存・積極的に活用していくべきである。                                                           |
| 団体旅行から個人旅行へなど旅行の形態が変化してきている。体験・散策・花の観察等目的やテーマを持ったものに人気が集まっている。これらのニーズに対する受け入れ態勢の整備が必要である。     |
| 立地条件もよく観光資源も多いので、行政とも協議しながら検討したい。                                                             |
| その土地の日常生活や仕事の姿を見てもらえれば、それが産業観光と言えるのでは・・・                                                      |
| 国・県が観光立国・立県を推進する中で、当会地域においても地域資源を開発し産業振興の活力としたい。                                              |
| 合併による融合を最大限に活用した産業振興を図りたい。                                                                    |
| 商業、工業、農業が連携した観光振興と地域特産品を結びつけた集客交流による地域おこし。また、地域の特産品の販売ショップと観光情報の発信拠点の充実。                      |
| 当商工会には二つの村があり、両村の行政施策方針等と競合せず、両村の合意の得られる産業振興を心がけたい。                                           |
| 観光客を受け入れるには、ハード面ばかりでなく受け入れる人の心構えに力を入れるべきである。                                                  |
| 歴史・自然等環境に関する観光はないので、体験型観光に取り組む用意はある。                                                          |
| 現在、ホテル・旅館と果実の農家・ＪＡがタイアップして、果実の販売・料理への活用等消費拡大に努めている。今後、商工会が中心となってホテル・旅館と観光農園の連携をコーディネートして行きたい。 |
| 今後、当市の活性化の基幹となる産業と考えている。行政及び商工会、ＪＡ等農業関係者、企業と連携を図り、振興計画を策定し実施していく。                             |

#### (14)調査結果のまとめ

最後の質問項目である各商工会の産業観光に対する考え・感想は多様である。留意すべきことは、産業観光という新しい概念の捉え方の違いが、反映されているということである。観光面に重きを置いている商工会、逆に産業面を中心とした考え方をしている商工会に二分されている。調査票の前書きでもう少し、産業観光について詳細に説明すべきだったと省みている。

一概に言うならば、観光地にある商工会は、本調査に積極的に答えてくれたようである。質問に対する空欄のなさや書き込み量の多さから、そのように推し量れるところである。観光地でない商工会は、答えの内容から関心の高さが窺えないようである。

産業観光について再度確認すると、既存の名所・旧跡等の観光資源ばかりに依存せず、訪れるビジターの知的好奇心等を満たす産業関連の地域資源を開発し、ソフトな価値を高めるコンテンツづくりを目指すものである。『見る』『学ぶ』『体験する』と言ったビジターのニーズにそった産業観光資源の充実はもちろん、受け入れる地域のホスピタリティも大事である。観光客等人々の地域交流をとおしての地域活性化が目的である。ゆえに、観光地でない地域においても、ソフト力により産業観光資源を発掘し、交流人口を増加させて地域活性化につなげることができるのである。

### 第3章 県内市町村(商工会地域)にみる産業観光の取組み事例

2章における31県下商工会に対するアンケート調査結果から、産業観光の取組みに積極的な3地域(商工会)を選定し、商工会職員に対するヒアリング、産業観光資源と見られるスポットを訪ね調査を実施した。調査した3地域は、南アルプス市、都留市、身延町である。当章では、これら3地域の産業観光の実情と今後の取組みのあり方について紹介する。

#### 1. 南アルプス市

##### (1) 南アルプス市の概要



平成15年4月1日、南アルプス市は、旧八田村、白根町、芦安村、若草町、櫛形町、甲西町の6町村が合併誕生した。平成17年3月に、当市では今後10年間に亘るまちづくりプラン『第1次南アルプス市総合計画』を策定した。当市の概要を当計画書に著されている内容を抜粋し、見ていくことにする。

##### 位置・面積・自然・気象

本市は、甲府盆地の西部地域を占める釜無川沿岸地域と御勅使川の扇状地、その上流部の南

アルプス山系からなる地域で、地理的・地形的に一つのまとまりをなしています。

市の中心部は首都東京から 100 k m 圏内にあり、周囲は、東は釜無川をはさんで、甲斐市、昭和町、田富町と接し、南は、増穂町、市川大門町(現市川三郷町)、早川町と、西は長野県長谷村、静岡県静岡市と、北は北杜市、韮崎市、甲斐市と接しています。

平坦部は、八田、白根、若草、櫛形、甲西の 5 地区からなっており、市街地は主として国道 52 号線沿いに広がっています。

山間部は、市の西部を占める芦安地区及び白根、櫛形地区の一部からなっています。特に、芦安地区の大部分は南アルプス国立公園に属しており、日本第 2 位の高峰である北岳(3,193 m)を筆頭に 3,000m 級の山々がそびえています。

市の西部は 3,000m 級の山々が連なる南アルプス山系となっており、南アルプス国立公園内には北岳をはじめ、間ノ岳(3,189m)、仙丈ヶ岳(3,033m)、鳳凰三山などが野呂川を囲むように峰を連ね、フォッサマグナ(糸魚川 - 静岡構造線)が地域を南北に貫いています。

夜叉神峠付近を源流とする御勅使川は、白根地区で扇状地を形成し、八田地区東北端で釜無川にそそいでいます。釜無川は市の東縁を八田、若草、甲西地区で氾濫原を形成しながら南下し、甲西地区南方で笛吹川と合流して富士川となっています。

本市を含む甲府盆地の年間気温は 13.9℃、晴天日数は、年平均 54 日で、夏は気温が高く、冬には、『ハケ岳おろし』が吹き、朝晩の冷え込みが強い内陸性気候となっていますが、盆地の中では比較的過ごしやすい地域となっています。

#### 歴史とあゆみ

本市には、櫛形地区の平岡台地で発掘された長田口遺跡や若草地区の溝呂木道上第 5 遺跡、櫛形地区の物見塚古墳などの貴重な遺跡や古墳があり、縄文・弥生・古墳・中世の各時代にわたって、すでに人々の暮らしが展開されたことがわかっています。

奈良時代には、釜無川や滝沢川沿岸で稲作が発達し、現在の『十日市』の発祥とされる市が立つなど、すでに商品経済の発達が見られました。平安時代には荘園が発達し、加賀美荘、奈胡荘、小笠原荘などが形成されました。戦国時代になると、武田信玄により、暴れ川と知られていた御勅使川の治水事業が行われました。

江戸時代になると、富士川舟運が開かれ、本市周辺では、駿河と信州を結ぶ『駿信往還』の要として栄えました。また、『原七郷』と称された白根、櫛形地区とその周辺は、煙草や甲州木綿などの産地となりました。1671 年(寛文 11 年)には日本三大堰のひとつである徳島堰が完成し、扇状地地域の水不足の解消が図られました。

明治時代になると、扇状地地域では生糸生産や養蚕が盛んとなった一方で、鉄道の開通や道路整備により、富士川舟運は衰えてきました。その後、昭和 30 年代の間までに、釜無川や御勅使川沿岸には水田が、扇状地地域は桑園が広がっていきましたが、外国との競争力の低下な

どにより、養蚕は徐々に衰退しました。

こうした中、昭和 40 年代半ばから桑園の樹園地化が始まり、果樹園地帯として急速に発展してきました。山岳地帯では、野呂川林道の整備により夜叉神峠の往来が容易となり、さらに温泉掘削や、交流施設の整備などにより、観光を中心として発達してきました。

町村合併の経過を見ると、明治初年には、本市は 62 の村に分かれていましたが、明治 7 年から 8 年の合併により 27 村、さらに明治 22 年の合併によって 20 村となりました。昭和 29 年から 34 年の合併により八田村、白根町、若草町、櫛形町、甲西町が成立し、明治 8 年に芦倉村と安通村の合併によって成立した芦安村を含め、現在の市となる前の 6 町村となりました。そして、平成 15 年 4 月 1 日、6 町村の合併により南アルプス市となりました。

#### 人口・世帯

##### 1)人口の推移

平成 12 年国勢調査による人口は 70,116 人で、山梨県の人口の 7.9%を占めています。昭和 35 年時点の人口と比べ約 3 割増加しており、長期的に人口増加傾向にあります。地区別では、八田地区、若草地区の伸びが、それぞれ 73.4%、54.6%と高く、白根地区では 30.9%、甲西地区では 21.6%、櫛形地区では 18.5%となっています。一方、芦安地区については 47.2%の減少となっています。

##### 2)年齢別人口構成

人口構成を年齢別に見ると、0 歳から 14 歳の層が占める割合が、山梨県全体の 15.5%に対し、本市は 17.7%と 2.2 ポイント高く、若者の占める比率が高くなっています。

65 歳以上の高齢者人口の割合は、県全体が 19.5%であるのに対し、本市は 17.9%と高齢化の進行は比較的緩やかです。しかし、昭和 60 年に 8,267 人であった高齢者人口が平成 12 年には 12,530 人となっており、確実に高齢化が進んでいる状況です。

##### 3)産業別就業人口

平成 12 年国勢調査によると、本市では 37,697 人が就業しており、第一次産業人口が 13.4%、第二次産業人口が 38.9%、第三次産業人口が 47.6%を占めています。

昭和 55 年を 100 とすると、全体では 131 と増加していますが、第一次産業は 60 に減少しています。また、第二次産業人口、第三次産業人口は、それぞれ 158、164 と大きく増加しています。

近年は、第二次産業の増加率が小幅になっているのに対して、第三次産業人口の増加率が高いのが大きな特徴となっています。

##### 4)世帯数

平成 12 年国勢調査によると、本市の世帯数は 21,594 世帯で、山梨県全体の世帯数の 7.0%を占めています。長期的には世帯数は増加しており、昭和 35 年時点の世帯数の 2 倍になっ

ています。一世帯当りの世帯員数を見ると、県全体が2.88人であるのに対し本市は3.25人と多くなっていますが、昭和35年の4.94人から減少してきています。

## (2)現状と問題点

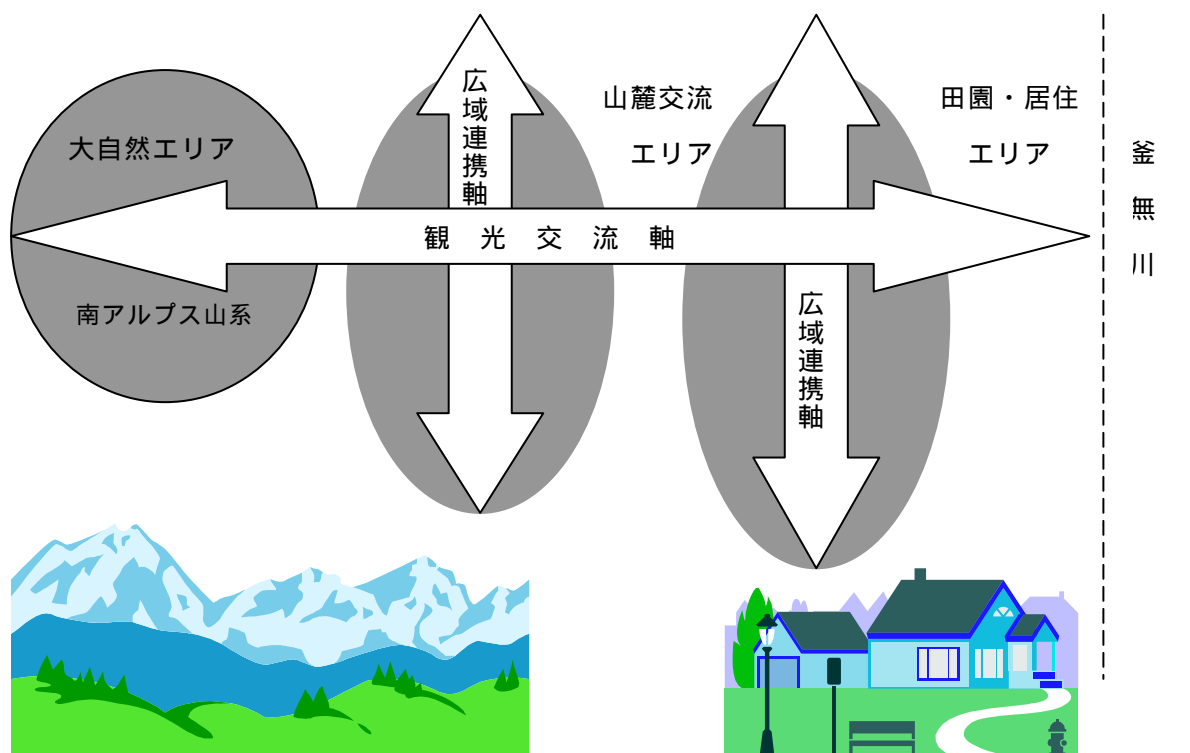
当市の特性とは・・・

これまで南アルプス市を概観してきたのであるが、当市の特徴はなんと言っても、新市誕生とともに名づけられた市名である。わが国初のカタカナ名であり、どこか牧歌的イメージを漂わせるものである。だが、当市の実情を見ると桃やさくらんぼ等の果樹産地であるが、まちの佇まいは南アルプスを想像させる感じではない。北アルプスの麓に広がる安曇野市のように、まち全体に田園風景が広がり、自然と人々の生活の調和を醸し出しているわけではない。

当市の一番の問題点は、名実を一体化させるまちづくりが求められると言えよう。当市の地形的制約は克服できないのであるが、果樹農業を核とする更なる観光拠点づくりを進め、田園都市を目指すべきであろう。『フルーツ王国・南アルプス市』を謳っているのであるから。

また、北岳を中心とする南アルプス山系の登山口である芦安地区を抱えている本市には、多くの登山客が訪れる。しかし、これらの登山客は登山と言う目的以外に、当市で時間を消費することは余りない。登山口から帰途に向かう登山客は、当市を通り抜けるわけであるから、立寄りたくするような観光資源の開発を考えるべきである。ここでもまた、南アルプスをイメージさせるようなアイデアが必要である。

当市は、『第1次南アルプス市総合計画』の中で、土地の利用のあり方として3つのエリアに区分しているので下記に示す。



南アルプス市商工会に対するアンケート調査結果から

第2章において、山梨県下商工会に対する産業観光に関するアンケート調査の結果を分析してきたのであるが、ここでは当市についての当市商工会の答えを見ていくことにする。

質問1の従来的(自然・名所旧跡等)観光資源の主なものとして、南アルプス山系や果物狩り等を挙げているが、注目すべき点として鬼面瓦会館の鬼面瓦体験づくり教室を答えてくれていることである。

質問2の地場産業については、甲州鬼面瓦、甲州武者幟、本染鯉幟を挙げている。

質問3の産業遺産・遺跡については、信玄公史跡(将棋頭と石積出し)、信玄公の治水事業、芦安鉦山跡地を挙げている。

質問4の現在の主な産業については、農産物(フルーツ等)と答えている。

質問5の新技术・先端技術関連の工場については、地場企業6社を挙げている。当市は、9つの工業団地を有しており、大手電機メーカーグループ企業をはじめとする多彩な誘致企業、そして地場企業の集積が図られている。当市の工業団地は下記のとおりである。

| 工業団地名    | 地区名  |
|----------|------|
| 御勅使南工業団地 | 八田地区 |
| 天房木工業団地  | 八田地区 |
| 飯野工業団地   | 白根地区 |
| 今諏訪A工業団地 | 白根地区 |
| 今諏訪B工業団地 | 白根地区 |
| 加賀美工業団地  | 若草地区 |
| 藤田工業団地   | 若草地区 |
| 櫛形工業団地   | 櫛形地区 |
| 甲西工業団地   | 甲西地区 |

上記の9工業団地の総面積は126.9haであるが、そのうち大規模な甲西工業団地が54.1haで42.6%を占めている。残りの8工業団地は、中小規模の団地である。前記したように当市は、県内平均より高齢化比率が低く人口が増加傾向にあるのは、第二次産業就業人口38.9%が示すとおり、これらの工業団地の整備により雇用の創出が図られてきたことが結果のひとつと言える。

質問7では、伝統工芸・クラフト関係の事業所を聞いたところ、井上染物店(甲西地区、藍染教室)、若草まちおこし協同組合(若草地区、鬼面瓦手づくり教室)を挙げている。

質問 8 の上記の事業所での見学・体験の可否については、できると答えている。

質問 9 の特産品については、村おこし事業で商品化した「フルーツワイン」、ワインとしてはその他「さくらんぼわいん」「春仙ソルダムワイン」を挙げている。また、村おこし事業で商品化した「名取春仙版画」がある。かつて地場産業であった「甲州鬼面瓦」、鬼面瓦にちなんだクッキー、絵馬、灰皿、キーホルダーがある。

質問 10 の当市における第一次産業での特産物を聞くと、さくらんぼ、桃、スモモ等果物を挙げている。

質問 11 における当市のまちづくりテーマは、「観光振興と南アルプス市ブランドづくり」と答えている。

質問 12 の観光振興事業に対する答えは「力を入れたい」、質問 13 の産業観光の取り組みについては「取り組んで行きたい」と前向きな姿勢である。

最後の質問である 14 の産業観光に対する考えや感想については、次のような内容である。

ひとつは、商業、工業、農業が連携した観光振興と地域特産品開発を結びつけた集客交流による地域おこし。もう一つは、地域特産品の販売ショップと観光情報の発信拠点の充実と答えている。

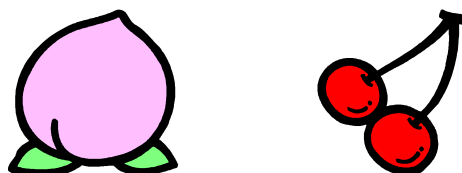
### (3) 克服すべき課題

先にふれたように産業観光という概念は、まだまだ知れ渡っていない。まちづくりにおける産業・観光の振興施策を担う市町村行政機関や商工会レベルさえ、ピンとこない様子なのである。分かりやすいイメージとして、『大人の社会科見学』とし、具体例としては甲府市のジュエリー工房巡りや旧勝沼町(甲州市)のワイナリー探訪であり、目標とすべきモデルである。

#### 田園都市のイメージを高める果樹農園の役割

さて、当市においては第一次産業であるさくらんぼ・桃園は、シーズン中には観光客が観光バスやマイカー等で訪れ、賑わいを見せている。いわゆる観光農園と言われるもので、産業と観光の一体からすると正しく産業観光の始祖・原型と言っていいものであろう。

しかし、当市や山梨県の観光農園ばかりでなく全国的にいえることだが、余りにも商売一辺倒に走りすぎている感じがする。観光客に、たわわに実った果実のジューシーな甘さを堪能させるばかりでなく、食品に対する安全・安心志向ニーズが強まる中で、農園主たちから観光客に対し作り手としての情報を伝達したらよい。トレーサビリティの起点となる農園として、情報交流の場づくりを目指すことが求められるのではないだろうか。果樹農園に携る者は、このような農園のコンセプトおよび活動フィールドの拡大を図る中で、当市の産業観光の核となっていくことが期待される。



### 特産品開発も田園都市コンセプトのもとに

前記した当市商工会アンケート結果にみられるように、さくらんぼ等のフルーツを原料としたワインが特産品として開発されている。その他、地元美術館に因んだ版画や甲州鬼面瓦をモチーフにした特産品があるが、やはり南アルプス市らしさから言うと、ワインをはじめとするフルーツ関連の加工食品の充実化であろう。現在、「アヤメの里特産品加工組合」が手づくりジャムとして、さくらんぼ、すもも、ぶどう、梅、ブルーベリー、ゆず、ネクタリン、りんごを商品化している。フルーツからジャムづくりは、全国いたるところで行なわれている。商品自体において、わたしたちの食卓に欠かせないものであることから、特産品として売出すことは難しさを抱えるが、田園都市コンセプトのイメージを確立する中で、産地特性を発揮できるのではないだろうか。

また、いろいろなフルーツを材料として、ジャムばかりでなくドライフルーツやジェラード等の商品開発の幅を広げ、南アルプスブランド・シリーズ化を図る戦略が求められるのではないだろうか。当ブランド戦略化を本格展開するためには、素人集団である地区特産加工組合では限界がある。当地には、梅製品等を生産している食品製造業が存在する。そこで、これらの食品製造業の自社製品の開発を含め、南アルプスブランド・シリーズ化の一環の中で、プロの力を借りながら製品づくりおよびマーケティングの展開を図る態勢が整えられたら面白い。

産業観光の振興から言うと、梅製品等食品製造業が特産品開発にコミットするとともに、工場敷地内に梅園等庭園を設けたり、工場内見学、漬物体験等の一般消費者や観光客の受入を行なってもらえばよい。そして菓子名店の存在もある。フルーツを材料にした和洋菓子の南アルプスブランド(例えば、南アルプスの乙女)の開発も可能ではないだろうか。

かつての産業の灯を守り伝え続ける



若草瓦会館



体験工房



鬼面瓦のお守り等

当市には、これといった地場産業は存在しない。当商工会アンケート調査結果では、甲州鬼面瓦、甲州武者幟、本染鯉幟を地場産業として挙げているが、現在では瓦業者の存在はなく、染物業者は1軒のみが営業を行なっている状況である。

だが、甲州鬼面瓦は『山梨県郷土伝統工芸認定品』として、『若草まちおこし協同組合』の手により、若草瓦会館で展示されている。若草瓦作りは、江戸時代の享保年間に、三河の職人から技術を受け継いだのが始まりで、当地に良質の粘土があったことも瓦産業の発展に貢献したのである。幕末の甲府城修築には、瓦御用を務めるなど歴史と伝統が受け継がれた。戦後の最盛期には県内随一の質量を誇り、30数件以上の瓦製造所があった。こうした、かつての地場産業の灯を消さないために、平成元年に旧若草商工会では、お守り工芸品『甲州鬼面瓦』を開発したのである。

館内には、甲州鬼面瓦の展示コーナーの他、瓦の優れた特性や瓦作りの歴史、お守りなどの販売コーナー、そして瓦作りを体験できる制作工房がある。鬼面瓦をはじめ、ペン立て、灰皿、キーホルダー等の作品づくりができる。主な瓦作りの体験の利用者は、当市の小中学生のようである。

社会科の授業等の一環として、もっと当市外の小中学生の利用が図られればよい。そのためには、若草まちおこし協同組合の奮闘とともに、当市の産業・観光部署と教育委員会の支援体制があり、伝統工芸品としての鬼面瓦を広くPRしていくことが求められる。そうなれば、子供たちばかりでなく、大人たちの好奇心にも及ぶことにもなろう。

甲州武者幟・鯉幟と言えば、江戸末期から藍染を始めた井上染物店のことである。江戸時代、武家階級では菖蒲の節句を重んじ、家紋を記した旗差し物から始まった武者幟。これに対し、町民は武家に対抗して鯉幟を立てる風習が生まれた。甲州で、こうした文化を支えてきたのが井上染物店である。現代の当主は6代目である。6代目はアメリカなどへ出展し、アーティストとして評価されるようになっている。7代目後継者もいるようなので、実用工芸から美術工芸の活動領域の中で活躍を期待したい。この伝統工芸品を当市の産業観光の視点で考えると、一民間企業の営利活動ととらえず、当市等の公的な支援の手を差し伸べたいものである。また、産業観光の振興のためには、それを支える担い手が重要であるので、井上染物店当主に活動の場を作ってあげることも考えていく必要がある。

#### 地域に埋もれている歴史を掘り起こし学ぶ

確かに当市には、これと言った特徴的な名所旧跡や温泉等の観光地でなく、また地場産業の形成が見られず産業観光面の資源にも乏しい。しかし、産業観光は、これまでの観光資源に依存するのではなく、俄かに注目された新たな概念である。その定義は、第1章で見てきたとおりであり、その地域に暮らしてきた人々の生業の態様を歴史文化から学び、産業観光の資源としてもよいだろうと考える。

## 1)十日市

旧若草町の十日市は、鎌倉時代に始まったものとされている。その当時、貨幣経済が遅れた地方では、物々交換が行なわれていた市が開かれていたのである。この地を治めていた甲斐源氏の武将、信濃守加賀美次郎遠光の館が十日市近くにあり、交易の場としての市を設けたのではないかとされている。藁を必要とする『原方』の人々と甘味を欲しがっている『田方』の人々が、互いに藁と干柿を交換するということから始められたようである。それから、『山方』の人が『田方』の人に手作りの臼を売って、その金を米に変えて持ち帰るということも行われていた。現在の十日市でも、臼・梯子・脚立・まな板等の木工品が売られており、往時の名残を偲ばせている。

この十日市こそ、山梨県を代表する流通経済の起こりであると思われる。この歴史的事実をわれわれは認識し、当市における産業観光のエピソードまたはストーリーづくりのモチーフにしたい。当市には、木材産業の拠点である『木の国サイト』があるが、余り有効に活用されているとは思われないことから、この拠点を使い『十日市』物語を創作・演出してみたらよい。

## 2)安藤家住宅

当市西南湖にある安藤家の先祖は、武田家の家臣で小尾の姓を名乗っていた。武田家滅亡後は、一時徳川家に仕えていたが後帰農して母方の安藤家の姓に変え、1708年に現在地に居を構えたといわれている。広大な敷地は板塀で囲まれ、重厚な入母屋造りの母屋、長屋門、中門、土蔵、茶室を設け、さらに池や築山を配した庭園があり、豪農としての地主経営が窺える立派な屋敷である。この安藤家住宅は、国の重要文化財、山梨県立保存民家に指定されている。

わたしたちは、産業観光の実践としての社会科見学を試みたわけであるが、想像をはるかに超えた歴史を背負った建造物に驚嘆した。安藤家に詰めている市役所職員に聞いたのだが、南は市川大門と隔てる笛吹川までの土地を所有していたと言う。わたしたちは、茶室から見事な秋色に染まった庭園に心を奪われながらも、安藤家の産業人としての経営やその暮らしぶりをイメージしたのである。

わたしたちは一部の関係者を除いて、ローカルな史跡・名勝地に余り関心を寄せてこなかったのではないと思う。安藤家の社会科見学から学んだことであるが、産業観光の資源づくりのひとつの方法は、ローカルな史跡・名勝地はもとより、地域に埋もれていたり隠れている歴史遺産等を発掘し、地域の人々が率先して見学体験してみることである。



安藤家住宅敷地内から見た  
母屋前景と右側は中門

### 3) 治水利水の歴史めぐり

当市で隠れた歴史的産業として、忘れてはならないのが武田信玄公の治水利水土木工事である。暴れ川と言われた御勅使川、釜無川の水害を防止し、所領を富ませようと戦国の武将武田信玄は、両河川の土木工事に知恵を注いだのである。その遺構として、石積出や将棋頭が存在する。信玄公の遺功を受け継ぐ形で、江戸時代には将監堤や徳島堰の工事が行われた。これらの遺構は、土木専門家の間では研究材料になって、彼らが当地を調査に訪れていると聞く。これらの遺構めぐりは、当市の歴史・文化財見どころマップのひとつに掲げられている。ややマニアックな観光コースと言えるが、産業観光にはピッタリのテーマなので、ウォークラリーと組み合わせてセッティングしてみると面白い。

#### 南アルプスブランドへの取り組みと産業観光

平成 16 年度に、南アルプス市では『南アルプス市地域振興計画策定調査』事業で、南アルプスブランドの確立を提起している。当報告書を見ると、ブランド・コンセプトは『花桃源郷づくり』としている。また、そのサブコンセプトは、キーワードだけでは少々分かりづらいが、南アルプス登山（極める花桃源郷）、山岳観光（癒しと感動の花桃源郷）、果の里観光（結ぶ花桃源郷）、フルーツ花工特産（味わいの花桃源郷）となっており、観光地・農産物・加工品・商業地 4 つの個別ブランドの構成のようである。調査報告の中では、当市において個別ブランドとしては、他地域との明確な差別化が不可能であると言い、ゆえに統合ブランドとしての地域ブランドを形成することが重要であると提言している。

このような南アルプス市のブランド施策を踏まえ、産業観光の振興の立場からブランドと産業観光の融合あるいは一体化する戦略を考えてみることにする。『花桃源郷』コンセプトは、産業観光面から見ても最優先の課題である。南アルプス市の名実を一致させる田園都市のイメージそのものである。さらに、果樹産業の振興を図るうえには果樹農家に後継者が育ち、持続可能な田園都市を築くためには、産業観光の観点からクライנגルデンに力を入れるべきである。

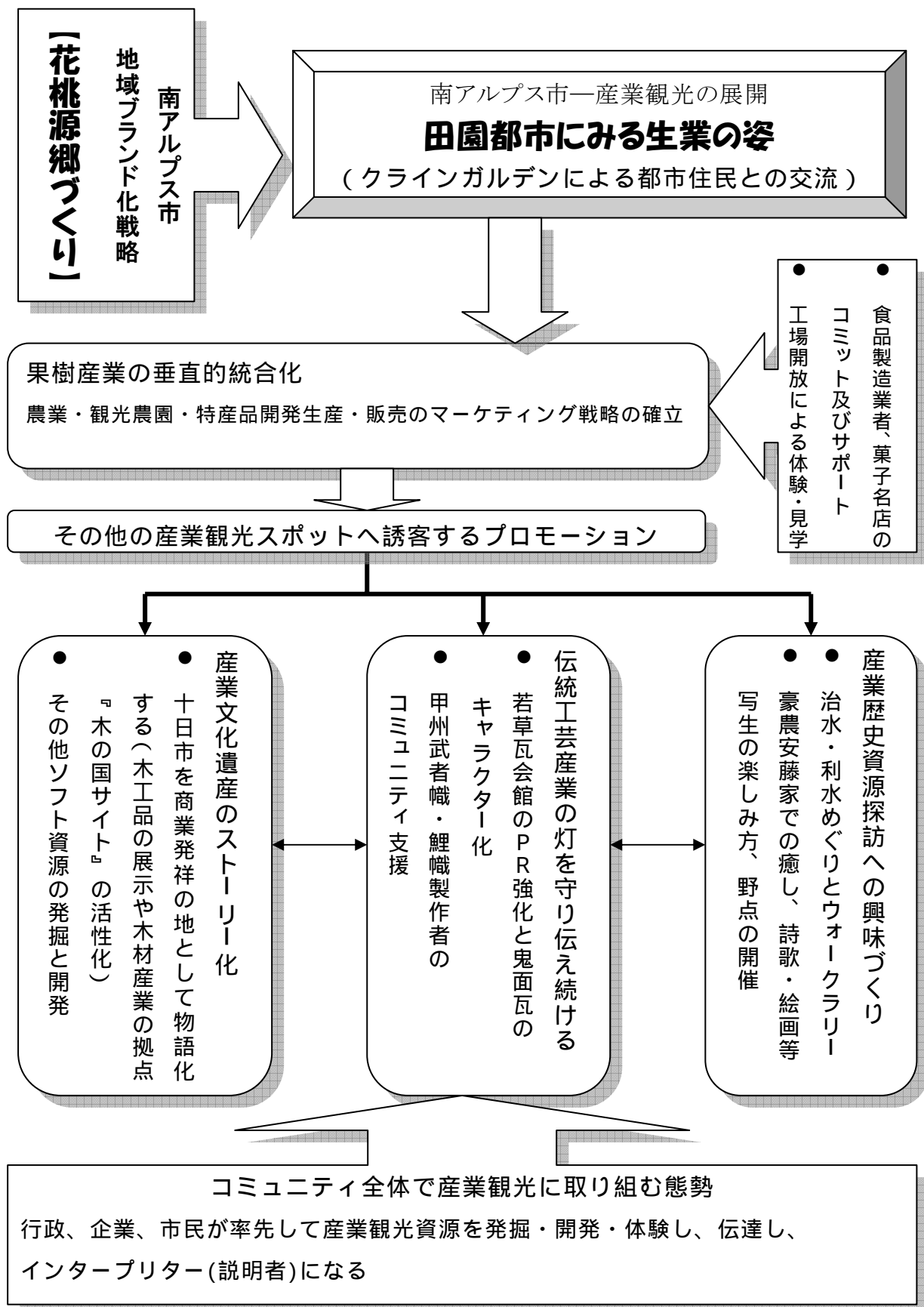
時代は大きな転換期で、2007 年問題と言われる団塊世代の大量定年退職の時代がすぐにやって来る。彼らのかなりの多くの者が、田舎の田圃で土いじりをしてみたいと言うニーズを持つ

ている。こうした都会の団塊世代に目をむけ、いきなり果樹作りは無理であるが、野菜作りから始めさせる市民農園事業を手がけるべきである。クラインガルデンを整備することにより、果樹農家等の農業従事者に刺激を与えることになるのではないだろうか。また、農業のプロである彼らが、インストラクターとしてクラインガルデンの利用者に農業の手ほどきをすることで、都市住民との交流が進む。

それから、花桃源郷として注目される当市の田園都市の礎を築いたとも言えるものに、産業歴史資源である信玄公の治水利水を忘れてはならない。このことは正しく、産業歴史を紡ぐ生業の姿と言えるものではないだろうか。

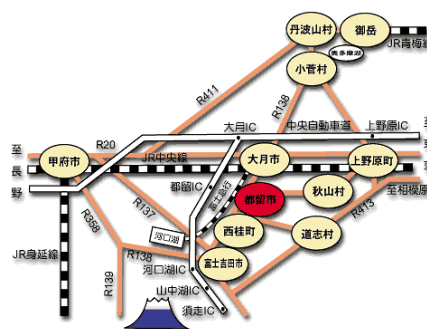
## まとめ

最後に、これまで述べてきた南アルプス市の産業観光資源についての体系化を考えてみよう。



### (1)都留市の概要

山梨県東部(富士北麓)地域は、古くから甲府盆地周辺の「国中地域」に対して「郡内地域」と呼ばれてきた。当市はその郡内地域の中心に位置しており、古くから城下町として当地域の経済・文化の中心として発展してきた。富士山から流れ出た溶岩を、山中湖を源とする桂川が削りだした台地にあり、海拔 490m、面積 16,158ha。西には御坂山塊が、東には丹沢山塊が連なる自然あふれるまちである。都心まで電車やバス・車で1時間半程度と交通条件にも恵まれている。



都留市には、牛石遺跡や中谷遺跡などの全国的にも有名な遺跡が存在しており、一杯窪遺跡では地面からおよそ10mの深さから約3万2千年前の石器を作った跡が発見されている。

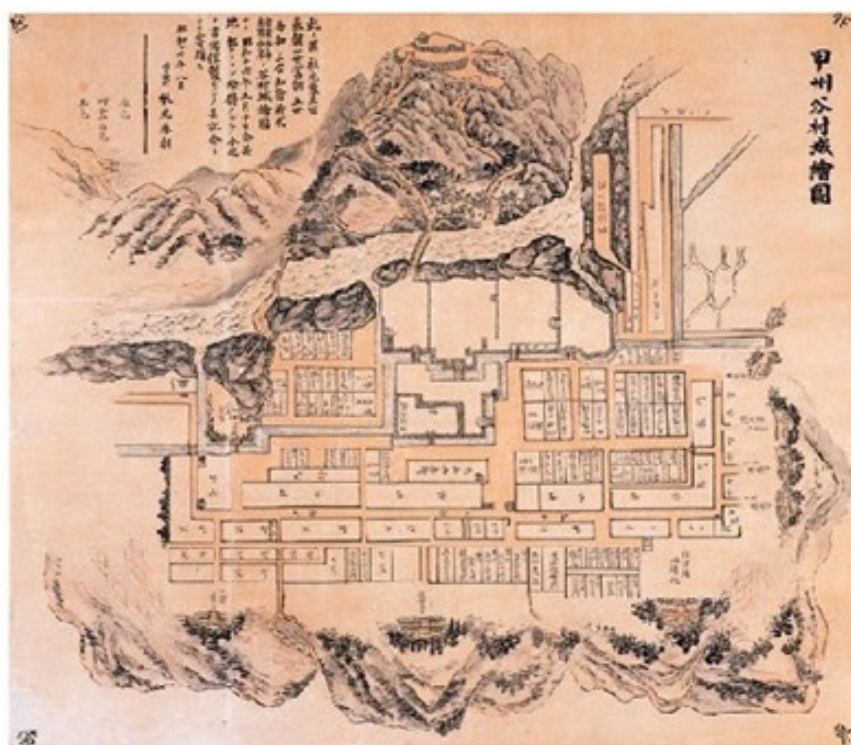
「都留」という地名が使われるようになったのは、今から 1,300 年前、山梨県が甲斐国(かいのくに)と呼ばれ、さらに山梨、八代、巨麻(摩)、都留の 4 つの郡に分けられていた頃からで、この郡名が昭和 29 年に市の名前となった。「つる」の地名は、「鶴が沢山いた」、「富士山の裾野が植物の蔓(つる)のように伸びている」などから用いられるようになったという。

戦国時代には、関東、駿河、甲斐との狭間に位置する重要な戦略拠点として、戦国時代に勢力を誇った小山田氏により谷村に館が移された。以降、谷村は郡内の中心として発達した。武田氏が滅びた後、甲府盆地一帯には徳川家康が、郡内には小田原の北条氏が進出した。徳川家康と北条氏とで争った黒駒の合戦以後は、甲斐国は、徳川家康の領地となり、その後は豊臣秀吉の一族や重臣の領地となった。それに伴って谷村には浅野長政の家老浅野氏重(うじしげ)らが入った。谷村が関東の徳川家康に対する抑えとして重要な拠点と位置づけられたのである。

現在勝山城跡があるお城山は、最初小山田氏の要塞城として整備され、その後浅野氏重によって勝山城が築城されたとされている。江戸時代には秋元氏が郡内地方を治め、勝山城と内橋で結んで町に近い所に谷村城を建てた。(写真は都留市 HP から)



現在も次のような「甲州谷村城絵図」が残っている。(下図は都留市 HP から)



(上の写真はミュージアム都留に展示されている勝山城の模型)

その頃、江戸の将軍が使うお茶は「採茶使(さいちゃし)」という幕府の役人が、京都の宇治から江戸まで毎年運んでおり、そのための行列のことを「お茶壺道中」といった。「お茶壺道中」は、毎年4月下旬から5月上旬にかけて江戸から宇治に向かったが、夏の暑さや湿気を避けるために、勝山城に保存しておき、涼くなってからまた江戸に運んだ。勝山城にはそのためのお茶蔵があったと伝えられている。

その後、秋元氏が川越に移った宝永元年(1704 年)から谷村は天領(江戸幕府が直接治める土地)となり、それが幕末まで続いた。天領となったため、勝山城や谷村城は取り壊されたが、代官所が置かれたり、絹織物の買い付けのために江戸の商人が支店を出したりしていたので、城下町の頃と変わらずに郡内地方の中心として栄えた。秋元氏の統治時代に地場産業として奨励された絹織物が江戸で評判の「郡内縞(ぐんないじま)」として成功したことがその要因の一つのようだ。

また、江戸の大火によって家を焼かれた松尾芭蕉が天和3年(1683年)に約半年間谷村で流寓(りゅうぐう)の生活を送り、蕉風俳句への開眼を果たしたといわれている。伝承として、谷村に流寓していた芭蕉が、当時、江戸で盛んに行われていた二十六夜待(二十六日の夜に出る月光には阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩の三尊が来迎するので、高い山に登って月を拝むこと)のために寓居から一里ほどの所にある戸沢村の二十六夜山に近い浄土真宗宝地山(ほうちざん)正蓮寺に遊んで、「名月の夜やさぞかしの宝地山」の句を詠んだとも言われている。

江戸時代の一時期、城下町ではお祭りが盛んに行われたが、なかでも9月1日に行われる八朔祭は「はっさく」と呼ばれ、盛大な大名行列や屋台の巡行で賑わった。八朔祭で巡行される屋台には、豪華な絵柄や模様を表した幕が2枚ないし4枚ずつ掛けられており、この幕のことを「飾幕(かざりまく)」と呼んでいる。八朔祭の屋台や飾幕が作られたのは、江戸時代の終わり頃、文化・文政期(1800～1829年)といわれている。飾幕には、外国産の緋羅紗(ひらしゃ)やビロード、金銀の糸などの高価な材料がふんだんに使われており、刺繍などの技術は、現在再現できないほど優れたもので当時の一流の職人達の手によるものと思われる。飾幕の下絵を描いたのは、葛飾北斎など当時最も有名な浮世絵師達で、当時の谷村の町が経済的に大変豊かだったことを物語っている。



この他、市内各所に多くの寺社、史跡、文化財などが点在している。寺社の数が多いのは、谷村が地方行政の中心であったため、各宗派とも拠点や別院として谷村に一ヶ寺を設けることを意図したと思われ、様々な宗派の寺院が谷村に集中している。

現在の「都留市」が誕生したのは、昭和29年4月であるが、そこに至る歴史をみると、明治維新で明治2年7月に「甲府県」が、4年11月に「山梨県」が生まれ、続く7、8年に町村合併が進められた。山梨県内では全国に先駆けて合併が行われ、現在の都留市内にあった17の村が合併して、谷村、禾生(かせい)、宝、盛里、開地、三吉、桂の7つの村となった。さらに

26年には桂村が分村して「東桂村」となり、29年には人口の増加により「谷村町」が誕生した。昭和初期の谷村町は昭和8年で戸数1,630戸、人口8,065人の南都留郡唯一の町で、甲斐絹の生産から消費までの中心地であった。その後、昭和28年に施行された町村合併促進法に基づき、明治・大正・昭和と続いた町村制度を変えて、新しく市制をしき動きが本格化し、29年4月29日、谷村町、宝村、禾生村、盛里村、東桂村の一町四村により「都留市」が誕生した。市役所は谷村町役場に置いてスタートし、戸数5,761戸、人口31,098人、面積16.168ha。塩山市に次いで山梨県4番目の市となった。

## 人口・世帯

平成 17 年 3 月 1 日現在の人口は、男 16,464 人、女 17,017 人の計 33,481 人。前述したように、当市が誕生した昭和 29 年 4 月 29 日の人口が 31,098 人であるから、ほとんど増えていない。しかし、世帯数をみると、平成 17 年 3 月 1 日現在の 11,613 世帯に対して、昭和 29 年 4 月 29 日は 5,761 世帯と倍増している。経済発展により生活様式が変化して核家族化が進行していることが窺われる。最も人口が多かったのは平成 10 年の 33,944 人で、その後は減少傾向が続いている。

就業人口をみると、昭和 30 年 10 月 1 日には、第 1 次産業就業者が 4,932 人(38%)、第 2 次産業就業者が 3,955 人(31%)、第 3 次産業就業者が 3,912 人(31%)であったのが、平成 12 年 10 月 1 日には第 1 次産業就業者が 344 人(2%)、第 2 次産業就業者が 7,478 人(43.9%)、第 3 次産業就業者が 9,205 人(54.1%)と第 1 次産業就業者が大幅に減少して、第 3 次産業就業者が半数を超えるほど増加しており、いわゆるサービス経済化が進展していることが窺われる。

(以上、人口・世帯数等のデータは都留市 HP より)

## (2)現状と問題点

### 第 5 次都留市長期総合計画「基本構想(案)」から

当市では平成 17 年度を目標年次として 8 年 3 月に策定した「第 4 次都留市長期総合計画」が 18 年 3 月に終了するため、現在「第 5 次都留市長期総合計画」を策定中である。ここでは、当市 HP に掲載されていた同計画「基本構想(案)」から、当市が目指す今後の方向性を見ていく。基本構想の期間は平成 18 年度(2006 年度)から平成 27 年度(2015 年度)の 10 年間である。

「基本構想(案)」には、「まちづくりの方向」として次の 7 項目が挙げられている。項目毎に列挙された事業内容から、「産業観光」につながると考えられるところを抜粋して掲載した。

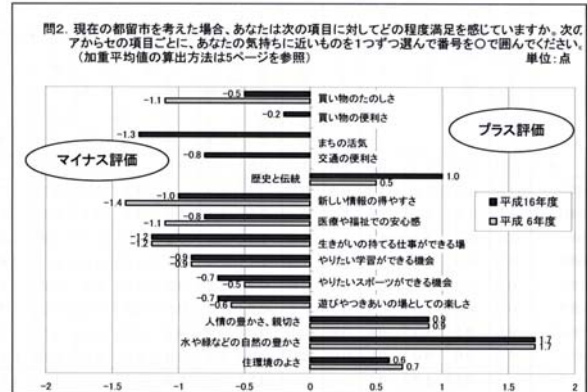
- 「環境首都つる」を目指したまちづくり
  - ・ 郷土の歴史、文化の保存・継承
- 個性あふれる地域産業を育むまちづくり
  - ・ 地域資源を活用した「参加・学習・体験都市つる」の推進
  - ・ 中央自動車道都留インターチェンジのフルインター化に伴う企業誘致等の推進
  - ・ 21 人企業育成プロジェクト(中小企業育成支援事業)による地場産業の振興
  - ・ SOHO やコミュニティビジネスの振興
- 人と自然が共生する環境のまちづくり
- あらゆる主体が参画し、協働するまちづくり
- 健康ではつらつと暮らせるまちづくり
- 人権を尊重し、互いに支え合う福祉のまちづくり
- 安全・安心に暮らせるまちづくり

市民意識調査報告書(平成 17 年 5 月)から

当市では、上記「総合計画」を策定する過程で平成 17 年 1 月に「市民意識調査」を実施した。同報告書を用いて産業観光の視点から同市の現状と問題点を抽出する。

### 1)生活に対する満足度

最も高い評価は「水や緑などの自然の豊かさ」であり、以下、「歴史と伝統」、「人情の豊かさ、親切さ」、「住環境のよさ」と続いている。最も低い評価は「まちの活気」であり、以下、「生きがいの持てる仕事ができる場」、「新しい情報の得やすさ」、「やりたい学習ができる機会」と続いている。観光産業の視点で見ると、「水や緑などの自然



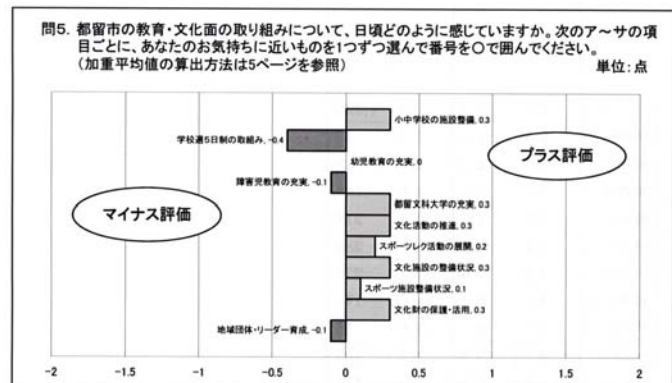
の豊かさ」、「歴史と伝統」、「人情の豊かさ、親切さ」、「住環境のよさ」がプラス評価となっているのは当市の「強み」である。逆に「まちの活気」が最も低い評価となっているのは当市の「弱み」である。

### 2)教育・文化面の満足度

「小中学校の施設整備」、「都留文科大学の充実」、「文化活動の推進」、「文化施設の整備状況」、「文化財の保護・活用」等の評価が高く、「学校週5日制の取り組み」等の評価が低い。

産業観光の視点で見ると、「都留文科大学の充実」、「文化活動の推進」、「文化施設の整備状況」、「文化財の保護・活用」がプラス評価となっているのは当市の「強み」である。

当市は前述した「基本構想(案)」における「まちづくりの方向」の一つとして「教育首都つる」を挙げている。その教育拠点としての「都留文科大学」の存在は

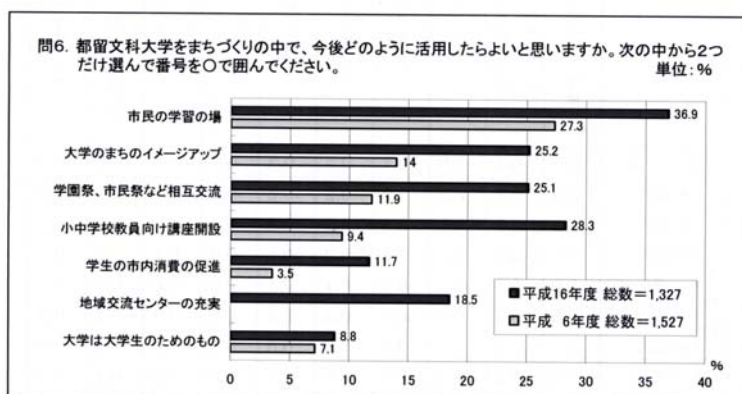


は当市の特徴でもあり、産業観光に「教育」という切り口を取り入れることもできそうだ。

### 3)都留文科大学の活用

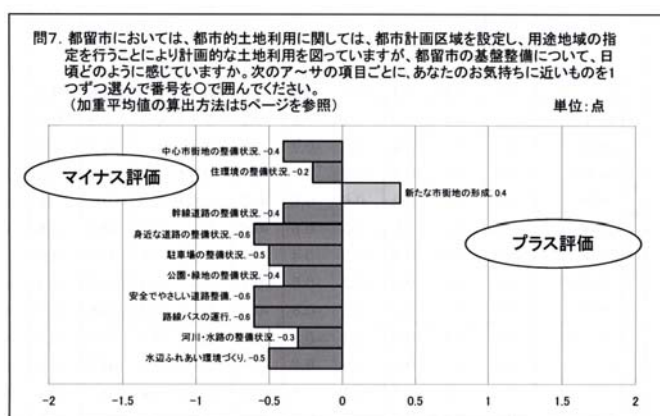
都留文科大学を取り込んだまちづくりをイメージしたときに、「公開講座の充実や施設の開放など市民の学習の場として活用する」が最も高く、以下、「小中学校教員向け講座開設」、「大学のまちのイメージアップ」、「学園祭、市民祭など相互交流」、「地域交流センターの充実」と続いている。地域交流センターとは、平成 15 年 4 月に大学内に設置されたもの。市民は当センターを学生との交流の場として活用したいと願っている。

産業観光の視点で見ると、「公開講座の充実や施設の開放など市民の学習の場として活用する」という意見が最も多く、且つ平成6年度に行われた同調査と比較して9.6ポイント高くなっていることに着眼すべきである。市民以外にも公開講座等を解放することにより、産業観光として捉えることもできるからである。



#### 4) 基盤整備の満足度

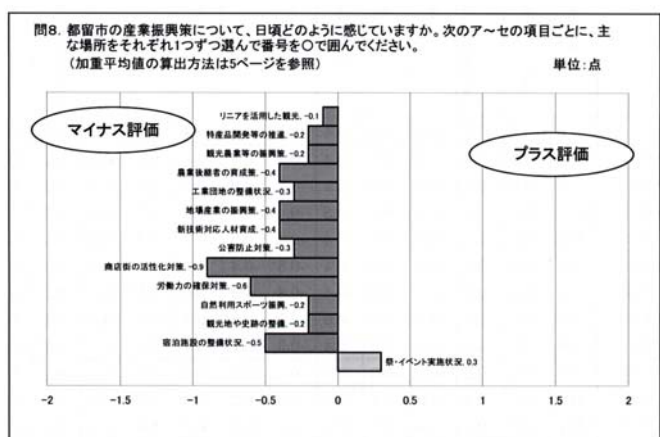
プラス評価は、都留文科大学周辺の「新たな市街地の形成」のみで、「道路や路線バス」、「駐車場」、「水辺ふれあい環境」、「公園緑地」、「中心市街地」等すべての項目がマイナス評価となっている。産業観光の視点で見ると、大きな「弱み」である。とくに当市は城下町として栄えた歴史



を有しており、他の地域にない産業観光の「強み」となり得るのに、かつて城下町であった中心市街地が整備されておらず、また、観光客を招き入れるのに必要な道路や駐車場の整備が遅れていることは、当市の城下町としての「強み」を相殺してしまう。

#### 5) 産業振興策の満足度

プラス評価は「祭・イベント実施状況」のみで、「商店街の活性化対策」を筆頭に、「労働力の確保対策」、「宿泊施設の整備状況」、「地場産業の振興策」、「観光農業等の振興策」、「特産品開発等の推進」、「リニアを活用した観光」等すべての項目がマイナス評価となっている。産業観光の視点で見ると、かつて城下町でもあった「商店街の活性化対策」、観光には欠かせない「宿泊施設の整備状況」、「特産品開発等の推進」、「リニアを活用した観光」がマイナス評価であるのは、大きな「弱み」である。



都留市商工会に対するアンケート調査結果から

第2章において、山梨県下商工会に対する産業観光に関するアンケート調査の結果を分析してきたのであるが、ここでは当市についての当市商工会の答えを見ていくことにする。

質問1の従来的(自然・名所旧跡等)観光資源の主なものとして、「祭(大名行列・屋台巡業・お茶壺道中)」、「伝統文化(甲州谷村城絵図・勝山城跡・松尾芭蕉句碑)」、「各種登山コース(三つ峠・御正体山・二十六夜山)」、「文化施設(ミュージアム都留・増田誠美術館・芭蕉月待ちの湯・うぐいすホール・桃林軒・サンパーク都留)」を挙げている。城下町として栄えた歴史があるだけに、沢山の観光資源を有している。これらの資源は産業観光の構成要素としては充実しているが、それぞれが点在しており物語を形成していない。

質問2の地場産業については、織物業を挙げている。当市に限らず郡内地域に広く営まれている地場産業である。江戸時代に「郡内縞」が流行した時のような活況の面影はなく、現在、当市内で織物業を営んでいるのは30件程度にまで減少しているという。しかし、企業数は減っても地場産業として継続する可能性は十分あるので、織物と産業観光を何とか結びつけたいところである。

質問3の産業遺産・遺跡については、「リニアモーターカーの走行実験」、「東京電力鹿留発電所・同谷村発電所」、「マイクロ水力発電施設」、「八朔屋台展示」、「尾県郷土資料館」、「商家資料館」、「水晶発掘跡」を挙げている。産業観光に結びつきそうなのは、全国に唯一の「リニアモーターカーの走行実験」、市役所の敷地内に設置され全国各地から視察が相次いでいる「マイクロ水力発電施設」であろうか。「リニアモーターカーの走行実験」は、年間10万人程度が訪れるが観光ルートの途中に立ち寄る場所として組まれており、その後市内へは流入しないという。



質問9の特産品については、既存の「ウメワイン・水掛菜等」の他、現在開発中の「パスタ料理のニョッキを用いた都留風パスタ」等を挙げている。地域の名物料理は、富士吉田の「うどん」、富士宮の「焼きそば」など集客に結びついている事例も多く、今後の都留風パスタの開発と展開には注目したい。

質問12の観光振興事業に対する答えは「力を入れて行きたい」、質問13の産業観光への取り組みについての答えは「取り組んで行きたい」と前向きな姿勢である。

最後の質問14の産業観光に対する考えや感想については「限られた地域では、観光流入人口がもたらす経済効果は大きく、地域活性化につながると考えている」と、これも前向きである。

### (3)克服すべき課題

これまで見てきた「都留市の概要」と「現状と問題点」から、当市の「強み」と「弱み」を整理して当市の産業観光のイメージを描くと共に、そのイメージを具体化するに当たり克服すべき課題は何かを導き出していきたい。

当市の「強み」と「弱み」

#### 1)当市の「強み」

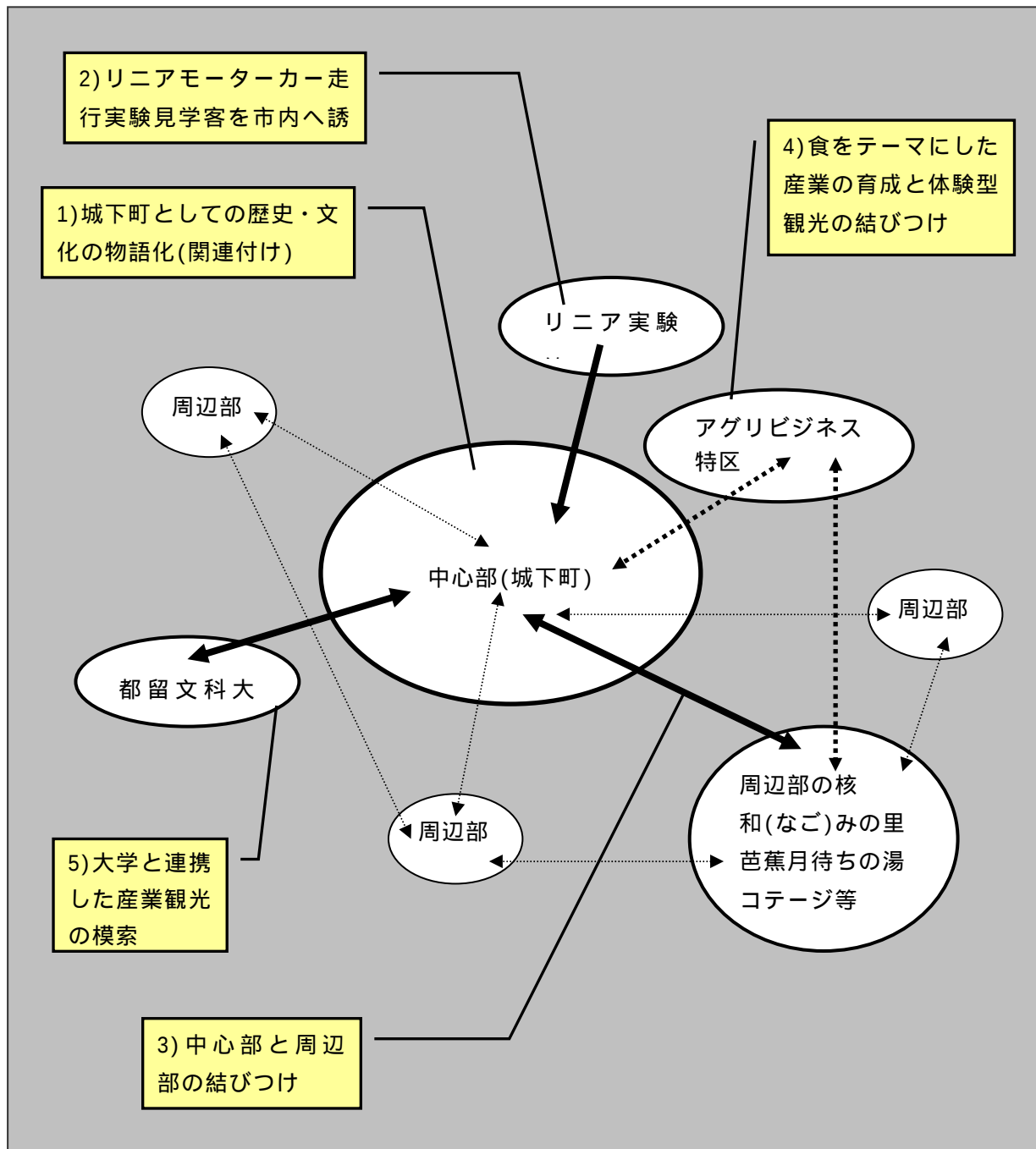
| 切り口                  | 地域資源としての強み                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 自然環境・<br>地域風土・<br>立地 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 郡内地域の中心に位置しており、西には御坂山塊が東には丹沢山塊が連なる自然あふれるまちである</li> <li>● 水や緑など自然が豊かである(水が美味しい/住環境がよい)</li> <li>● 人情が豊かで、親切である</li> <li>● 都心まで電車やバス・車で1時間半程度と近い</li> <li>● 中央自動車道のフルインターチェンジ化が計画されている</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                              |
| 歴史・文化                | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 全国的にも有名な遺跡が存在しており、3万2千年前の石器を作った跡が発見(それだけ古くから人が生活していた地域)</li> <li>● 戦国時代に小山田氏が城下町を形成してから郡内の中心地</li> <li>● 江戸時代に秋元氏が統治して経済的に大きく発展</li> <li>● 勝山城(小山田氏、浅野氏)と谷村城(秋元氏)の整備・築城</li> <li>● 江戸時代の茶壺道中(茶壺におわれてとっぴんしゃん)と御茶蔵</li> <li>● 絹織物が「郡内縞」として江戸で評判になった(経済の繁栄)</li> <li>● 松尾芭蕉が半年流寓して蕉風俳句の開眼を果たした(桃林軒)</li> <li>● 八朔祭が盛大に行われた(大名行列、屋台の巡行と飾幕〔高価な材料と優れた技術、葛飾北斎等有名な浮世絵師の下絵〕)</li> <li>● 市内各地に寺社、史跡、文化財が点在(城下町の面影、旧町名の石柱設置)</li> </ul> |
| 歴史上の<br>人物との<br>関係   | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 小山田氏(小山田越中守信有が城下町を整備)</li> <li>● 豊臣秀吉の一族や重臣の領地(羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政)</li> <li>● 秋元氏(泰朝、富朝、喬朝)が繊維産業の振興を図った</li> <li>● 当市で蕉風俳句を開眼したといわれる松尾芭蕉の伝承が残っている</li> <li>● 葛飾北斎等有名な浮世絵師が飾幕の下絵を描いた</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                   |
| 教育・文化                | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 都留文科大学の存在(公開講座の充実や施設の開放など市民の学習の場としての活用)</li> <li>● 文化施設の整備・保護・活用、文化活動の推進</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 産業振興                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 祭・イベントの充実(八朔祭〔大名行列、屋台巡行と飾幕〕)</li> <li>● 伝統のある地場産業(織物産業)の継続</li> <li>● リニアモーターカーの走行実験(年間10万人の集客力を有する)</li> <li>● マイクロ水力発電施設(全国から視察が相次ぐ)</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                            |

|             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 公的機関<br>の支援 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 郷土の歴史、文化の保存・継承</li> <li>● 地域資源を活用した「参加・学習・体験都市つる」の推進</li> <li>● 都留ウォーキングトレイル事業(歩きたくなる城下町谷村のみち整備)</li> <li>● 勝山城跡(国史跡指定推進)と茶壺蔵整備</li> <li>● 二十六夜山の麓に農と食と温泉による「和み(なごみ)」空間を整備 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 芭蕉月待ちの湯、ゆうゆう広場、わくわく広場</li> <li>・ コテージ6棟、直売・体験施設、体験農園等の整備</li> </ul> </li> <li>● つるアグリビジネス推進特区による農業新規参入者と旅館・民宿・飲食店などが連携して食と健康をテーマとする地域ブランドを確立</li> <li>● 商工会の産業観光への積極的な取り組み姿勢</li> <li>● 商工会による新しい特産品の開発(ニョッキを用いた都留風パスタ)</li> </ul> |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 2) 当市の「弱み」

| 切り口                  | 地域資源としての弱み                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 自然環境・<br>地域風土・<br>立地 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 目玉になる観光資源がない</li> <li>● 新しい情報が得にくい(情報発信不足、閉鎖性)</li> <li>● 中心市街地(旧城下町)に大型駐車場がない</li> </ul>                                                                                                                                                                                   |
| 歴史・文化                | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 城下町の面影があまり残っていない</li> <li>● 歴史・文化的観光資源が沢山あるが、物語を形成していない</li> <li>● 歴史上の事実が学術的に立証されていない(発掘調査がなされていない、資料が残っていない等)</li> <li>● 著名な歴史上の人物との関わりが薄い(決め手に欠ける)</li> </ul>                                                                                                            |
| 教育・文化                | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域団体・リーダー育成が十分でない</li> <li>● やりたい学習ができる機会が少ない</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                    |
| 産業振興                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生活に対する満足度として「まちの活気」が最も低い</li> <li>● 中心市街地(旧城下町)の整備や活性化対策が不十分</li> <li>● その他の基盤整備(道路、駐車場等)が不十分</li> <li>● リニアを活用した観光対策が不十分(訪れた観光客が市内に流入しない)</li> <li>● 地場産業、観光農業の振興策が不十分</li> <li>● 宿泊施設の整備が不十分</li> <li>● 特産品開発等の推進が不十分</li> <li>● 織物産業に替わる体験・見学型の産業(製造業)が見当たらない</li> </ul> |

「強み」と「弱み」から導き出される産業観光のイメージ



上記イメージを具体化するための課題等

1) 城下町としての歴史・文化の物語化(関連付け)

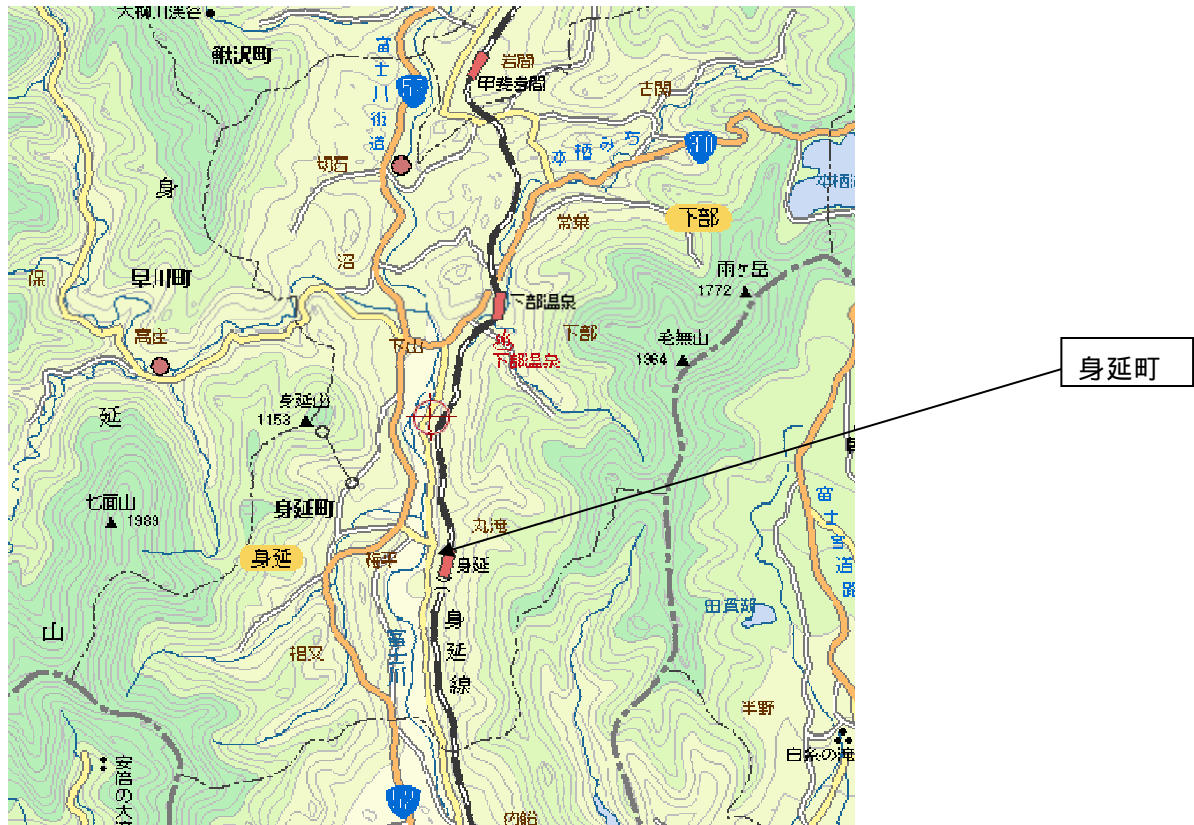
- 都留ウォーキングトレイル事業(歩きたくなる城下町谷村のみち整備)
- ・ 市の事業として平成 16～19 年度整備予定
- 都留ウォーキングトレイル事業を補完する事業の検討
- ・ 中心部まで車で来る人のために駐車場の整備
- ・ 甲州谷村城絵図を標識にしてまちなかの要所に設置(パンフレットにして配布)

- ・飲食店や和菓子店等による「城下町名物メニュー」の開発(マップの作成) 等
  - 郷土の歴史、文化の保存・継承
  - ・上記のウォーキングトレイル事業と並行して城下町散策地図等を作成
  - ・郡内縞のリバイバル(デザイナー、アパレルメーカー等と提携)による織物産業の活性化
  - ・城下町グッズの開発(八朔祭関連〔屋台、飾幕〕茶壺道中〔ずいずいずっころばし~茶壺におわれてとっぴんしゃん〕、郡内縞、松尾芭蕉等)
  - ・芭蕉のさと都留「ふれあい全国俳句大会」と城下町散策との結びつけ
  - 勝山城跡(国史跡指定推進)と茶壺蔵整備
  - ・勝山城跡へのサインを整備
  - ・城下町の象徴である勝山城跡の活用方法を具体的に検討
  - ・中央自動車道都留インターチェンジのフルインター化に伴う勝山城跡の活用を検討
- 2)リニアモーターカー走行実験見学客を市内へ誘導
- 山梨県立リニア見学センターとの連携
  - 最先端輸送手段リニアと江戸時代のお茶壺道中との比較の妙味で物語を創作
  - 中心部(城下町)や周辺部の核(和みの里)への誘導を工夫
- 3)中心部と周辺部の結びつけ
- 松尾芭蕉で結ぶ
  - ・松尾芭蕉とゆかりのある寺社等でつなげる
  - ・松尾芭蕉の寓居である「桃林軒」と二十六夜待伝承のある「月待ちの湯」をつなげる
  - ・松尾芭蕉の句碑のある場所でつなげる
  - 寺社、史跡、名勝地、体験施設等で結ぶ
- 4)食をテーマにした産業の育成と体験型観光の結びつけ
- アグリビジネス特区との連携
  - ・農業新規参入者等農業者と飲食店等が連携して地域ならではの食を提供
  - ・経営指導のノウハウを有する商工会によるアグリビジネス支援(特産品開発、販路開拓等)
  - 農と食と温泉をテーマにした「和みの里」による体験型観光の充実
  - 商工会による名物料理「都留風パスタ」の開発と地域ブランド育成
  - ・レシピの開発と取扱店の募集
  - ・取扱店マップの作成等マーケティング戦略構築
- 5)大学と連携した産業観光の模索
- 市民以外への公開講座の解放と地域資源を活用した体験型学習の機会を提供
  - 当市の歴史・文化・産業を学ぶ講座の充実と大人の社会科見学としての産業観光を推進

### 3.身延町

#### (1)身延町の概要

平成 16 年 9 月 13 日、山梨県南巨摩郡旧身延町と中富町と西八代郡下部町とが合併し、南巨摩郡の新「身延町」となった。身延町の位置は、県の南部にあたり富士川をはさんで東側に身延線、西側に国道 52 号線が南北に走り、山梨県の中であって、身延町は静岡県側に近い所にある。



身延町は、この国道 52 号線や身延線に沿って、平坦部に町並みを形成している。そして、特筆すべきことは、この身延町は、町名のように日蓮宗総本山身延山久遠寺を擁した門前町として知られ、全国から信者が参拝に訪れることで有名である。この新「身延町」の概要を項目別に見ると、個性豊かな要素を保有している。

町のキャッチフレーズ : 安らぎと 活力あふれる ひらかれたまち 「身延町」

総人口 : 16,964 人 (平成 17 年 11 月 30 日)

面積は : 304.83 k m<sup>2</sup>

隣接自治体 : 山梨県 / 市川三郷町、上九一色村、鯉沢町、早川町、南部町

静岡県 / 静岡市葵区、富士宮市

身延町役場 : 〒409 - 3392 山梨県南巨摩郡身延町切石 350 (旧中富町役場)

地理 (山) : 身延山、富士見山、毛無山

(河川) : 富士川、常葉川、早川

(湖沼) : 本栖湖

名所・旧跡 : 身延山久遠寺、上沢寺、富士川クラフトパーク、大城溪谷、大聖寺と不動明王、歴史民俗資料館、句碑の里、富士見山、本栖湖、湯の奥金山、毛無山等

特産品 : みのぶまんじゅう、南天のどアメ、南天ワイン、身延茶、ゆば、しいたけ、しいたけ茶、西島和紙、曙の大豆、手作り豆腐等

美術館 : なかとみ現代工芸美術館

博物館・資料館 : 金山博物館、歴史民族資料館、きもの資料館

里づくり : なかとみ和紙の里、句碑の里、青少年自然の里、ホタルの里、みのぶゆばの里、南天の里、竹炭の里、木喰いの里、ヤマメの里等

公園 : 富士川クラフトパーク、リバーサイドパーク、下部農村文化公園等

道の駅等 : 道の駅しもべ、道の駅富士川ふるさと工芸館、J Aふじかわ中富専売所等

商業集積地 : 西島和紙の里南集積地、飯富病院南集積地、身延ショッピングセンター等

工業団地 : 峡南工業団地、身延工業団地等

地場産業 : 西島和紙、印章等

温泉 : 下部温泉、身延温泉、塩ノ沢温泉、榎ノ木温泉、門野温泉、康栄閣等

ゴルフ場 : 富士川カントリーゴルフ場、身延ゴルフ倶楽部等

以上、をあげることができるが、3 町が合併し、まだ、1 年 3 ケ月ばかりなので、概略とは言っても、見直し、掘り起こしの側面からも一応網羅的にあげてみた。

もう少し詳しく人口・面積・自然等を、身延町のホームページからの抜粋に加筆すると、人口は、16,964 人（平成 17 年 11 月 30 日）で、平成 12 年の国勢調査（旧 3 町合計）の 18,021 人に対し 1,057 人、5.9%の減少である。昭和 35 年～平成 17 年の 45 年間では、約 55%の大幅な減少となっている。近年減少ペースは鈍ってきているが、昭和 60 年には、22,327 人だった人口は、平成 2 年には 20,849 人に、平成 7 年には 19,570 人に、平成 12 年には 18,021 人に、平成 17 年は 16,964 人と減少を続け下げ止まっていない。

年齢別人口構成では、平成 12 年の国勢調査で、0 歳～14 歳までが 12.2%、15 歳～64 歳までが 64.6%、65 歳以上が 33.2%となっている。山梨県全体との数値（65 歳以上 19.5%）と比較してみると高齢化の進行が著しい。

産業就業人口では、平成 12 年の国勢調査で、第 1 次産業 381 人（4.6%）、第 2 次産業 3,256 人（39.1%）、第 3 次産業 4,696 人（56.3%）となっており、平成 17 年の構成比は平成 12 年と比べてあまり変化はない。ただ、耕地面積が少ないこともあり、第 1 次産業の比率が低く変化率は少ないが、第 2 次産業が減少する傾向と、逆に、その分第 3 次産業が穴埋めし増加傾向となっている。

また、世帯数では、平成 12 年の国勢調査で 6,382 世帯となり、1 世帯あたりの人員は 2.82 人となっている。

一方、面積は 304.83k m<sup>2</sup> (旧身延町 131.12k m<sup>2</sup>、旧中富町 43.37k m<sup>2</sup>、旧下部町 130.34k m<sup>2</sup>) で山梨県の面積の 6.8% を占めており、その約 80% は森林である。

土地利用をみると、宅地 3.49k m<sup>2</sup> (1.1%)、農用地 5.78k m<sup>2</sup> (1.9%)、森林等 243.39k m<sup>2</sup> (79.8%) などとなっており、宅地や農地の割合は極端に低く、特に農地の耕地率は山梨県全体 9.7% に対して 3.7% となっている。

自然は、森林が全体の 80% と、緑豊かな安らいだ良好な環境にある。東南に毛無山、富士山を仰ぎ、西北に、富士見山、栗倉山、身延山、鷹鳥山等の 1000m 級の山が連なり山岳部を形成し、その間を縫うように日本三大急流のひとつ、富士川が南北に流れている。

## (2) 合併前の旧 3 町の概要

### 旧身延町

本町は、県の南部に位置し、山村は富士川を挟んで山間に点在しているが、町並みは国道 52 号線や県道沿いの比較的平坦地に形成されている。全体的には緑豊かな自然に恵まれ、場所によっては岩肌に海底が隆起した形跡を化石として見ることもできる個所や糸魚川-静岡構造線の跡を見ることができ、地質学的にも興味のもてる場所である。

身延町の最大の特徴は、町の名前のとおり、日蓮宗総本山身延山久遠寺の存在で、多くの宿坊を抱えた門前町として栄え、全国から信者が参拝に訪れる。また、最寄り駅の身延駅は甲府・富士間を走っているほぼ中間に位置し、その名も身延線という知名度的には申し分ない。

また、高齢者の生甲斐、働く場所として、竹炭の生産と竹炭の応用製品の開発に知恵を絞っている。和田峠に竹炭の里をつくり、マスコミにも取り上げられ注目を集めている。



久遠寺山門

1) 町のキャッチフレーズ： 緑あふれる歴史と安らぎのまほろば・みのぶ

2) 人 口： 7,774 人 (平成 16 年 8 月 31 日)

3) 面 積： 131.12 k m<sup>2</sup>

4) 名所・旧跡： 身延山久遠寺・上沢寺、富士川クラフトパーク、大城溪谷

5) 特 産 品： みのぶまんじゅう、ゆば、南天のどアメ、南天ワイン

### 旧中富町

本町も、県の南部に位置し、昔は富士川水運の宿駅として栄え、甲斐・駿河間の輸送に貢献してきた。富士川沿いに国道 52 号線が走り、町並みも国道に沿って形成されたが、現在は、より富士川沿いにバイパスがつくられ、町並みは交通量過多による騒音から開放されたが、活気の面でいまひとつ盛り上がらない面もある。しかし、生活のリズムに落ち着きもでき、住まいと商業集積地の分離がされ、自然豊かな中であって消費行動が変化しつつある。

自然では、西に富士見山がそびえ、山頂からは日本一の富士山の雄姿を見ることができ、山麓に眼を移せば富士川が太陽の光に反射して流れ、荘厳な景観に圧倒される。富士見山登山口近くには、自然豊かな中での研修や体験学習ができる「青少年自然の里」や、全国から俳句愛好者の俳句が山道の道なりに碑が立ち並ぶ「句碑の里」があり注目されている。

また、町の北側に西島があり、西島和紙として400年以上の歴史と伝統を有し、その技術は全国の書道愛好家から注目されている。こうした伝統の地場産業の発展と育成を願って「和紙の里」がオープンされ、和紙の手漉き体験もできるコーナーもある。あわせて隣接には、個性豊かな「現代工芸美術館」や地域の旬の食材を味わえる「味菜庵」も併設され一つの文化拠点になっている。

1)町のキャッチフレーズ：やすらぎと希望あふれる幸福人口を増やす なかとみ

2)人口：4,285人（平成16年8月31日）

3)面積：43.37k㎡

4)名所・旧跡：大聖寺と不動明王、歴史民族資料館、句碑の里

5)特産品：西島和紙、しいたけ、曙の大豆、南天ワイン



旧下部町

（句碑の里）

本町も、県の南部に位置し、御坂山系の南端にあたる富士川の東側に属す山間の町だ。したがって、山林は町全体の82%もあり、豊かな溪流が多く、ヤマメ・イワナ釣りが行われ「ヤマメの里」を形成している。溪流には自然発生率日本一のホタルの里があり、自然環境が全体的には良好に保たれて緑豊かな山里が点在している。

また、富士五湖の一つ本栖湖や武田信玄の隠し湯として有名な下部温泉といった、全国版の観光資源に恵まれ、年間を通じて多くの観光客が訪れる。特に、下部温泉の傷を癒す効用は有名で日本の名湯百選に選ばれている。下部温泉の奥には、湯之奥金山やそれを管理していた門西家の住宅は、現在国指定の重要文化財となっている。

一方、本栖湖はウィンドサーフィンの愛好家の拠点となっており、本栖湖から見た富士山の景観は素晴らしく、それは千円札に使われている。

1)町のキャッチフレーズ：渓谷に心やすらぐ下部町

2)人口：5,181人（平成16年8月31日）

3)面積：130.34k㎡

4)名所・旧跡：本栖湖、毛無山、湯の奥金山、門西家住宅

5)特産品：甲州小梅、お茶、しいたけ、ヤマメ、ミネラルウォーター



（下部温泉郷）

以上の3つの町が、平成16年9月13日に合併し、新「身延町」になった。3つの町とも、その町のキャッチフレーズに共通するものに「やすらぎ」があり、自然豊かな、安らぎに満ちた環境にあるが、人口は年々減少している。

### (3)現状と問題点

#### 身延町の特長

身延町は山梨県の南部に存在し、まず、日蓮宗総本山身延山久遠寺を擁し、全国から信者が参拝にみえる。また、富士五湖の一つ本栖湖や武田信玄の隠し湯として有名な下部温泉といった全国級の名所・旧跡を擁していることは町の宝であり、すでに魅力ある地域としてのブランド力を有している。これは山梨県内の他の市町村の中でも恵まれているといえる。また、冒頭に記した身延町の概要を項目別に見ても、自然の豊かさの上にバラエティに富んだ多くの条件を持ち、これらの組み合わせによる、コース別、セット別、グループ別に組み合わせれば、町の観光は、将来に向かって多くの明るい可能性をもっている。

ところで、旧3町は山梨県峡南地区の富士川沿いの国道52号線や常葉川沿いの国道300号線の平坦部に人口が集積し、地域的、歴史的、文化的にも背景が似ている。また、昔からさまざまな交流が頻繁におこなわれた地域で、それぞれの地場産業や観光産業をベースとする点も共通があり、この3町が時代の要請であるとはいえ、合併したことはごく自然のことと思われる。したがって、これからは3町の特長と個性をいかに有機的に結びつけ、相乗効果をあげる事が重要となってくる。

産業観光に関するアンケートによる身延町の現状（身延町商工会に対する調査結果）

質問1．貴会地域における従来の（自然・名所旧跡等）観光資源の主なものをあげてください。

|              |                |      |       |      |
|--------------|----------------|------|-------|------|
| 身延山<br>下部温泉郷 | 本栖湖<br>ホタルの里一色 | 富士見山 | 湯の奥金山 | 句碑の里 |
|--------------|----------------|------|-------|------|

質問2．貴会地域における地場産業がありましたら、あげてください。

|      |    |    |
|------|----|----|
| 西島和紙 | 印章 | 味噌 |
|------|----|----|

質問3．貴会地域における歴史的「産業遺産・遺跡」がありましたら、あげてください。

（産業遺産・遺跡とは、例えば小樽運河や四国新居浜市の別子銅山など地域産業にゆかりのある施設等）

|     |       |
|-----|-------|
| 身延山 | 湯の奥金山 |
|-----|-------|

質問4．貴会地域における現在の主な産業はなんですか。

|                  |               |
|------------------|---------------|
| 公共事業を主体とした建設・土木業 | 身延山・下部温泉等観光産業 |
|------------------|---------------|

質問5．貴会地域における新技術・先端技術関連の工場はありますか。ありましたら、その概要を記入してください。

|    |
|----|
| なし |
|----|

質問6．貴会地域の企業で、工場見学を実施しているところがありますか。ありましたら、企業名を記入してください。（企業名          記入なし          ）

質問7．貴会地域で、伝統工芸あるいはクラフト関係で活躍している事業所はありますか。あり

ましたら、その概要を記入してください。

富士川クラフトパーク内にて「和紙」製品の製造を行っている（西島和紙工房）和紙の里

質問 8．上記事業所の工房で見学や体験はできますか。どちらかに○印をつけてください。

- ① できる                      ② できない

質問 9．貴会地域における特産品はなんですか。その概要を記入ください。

西島和紙（手漉き書道用紙） 曙大豆（曙地区のみ採れる大型大豆） ゆば  
身延茶（24 種の薬草入り）

質問 10．貴会地域における第一次産業での特産物はなんですか。

曙大豆

質問 11．貴会地域におけるまちづくりテーマ（行政の施策方針等）はなんですか。

安らぎと    活力ある    ひらかれた    まちづくり

質問 12．貴会は、観光振興事業に力を入れて行きたいとお考えですか。

- ① 力を入れて行きたい                      ② あまり考えていない

質問 13．貴会は、産業観光に取り組んで行きたいと思いますか。

- ① 取り組んで行きたい                      ② あまり考えていない

質問 14．最後に、産業観光振興に対する貴会の考え・感想をお聞かせください。

合併による融合を最大限活用した産業観光の振興を図りたい

以上が、山梨県商工会連合会で、おこなったアンケート調査で、身延町商工会が回答してきた調査結果である。

この結果を見ると、質問 4 の現在の主な産業はなんですか。という問いに「公共事業を主体とした建設・土木業と身延山・下部温泉等観光産業」と答えている。これはこの地域が山岳森林地帯が多く、耕作面積が少なかったため農業が発展できず、逆に、山岳森林地帯であるため、富士川や常葉川の支流が多く治水のための土木工事が行われたためである。

また、身延山・下部温泉等観光産業とも回答している。平成 12 年の国勢調査では第 3 次産業の構成比は 56.3%となっており、将来的にも、第 1 次産業、第 2 次産業とも地域の特性から、衰退傾向が予測され、逆に第 3 次産業は、当町が多くの観光資源を持ち、活用如何により、さらに発展が期待される。

また、質問 5 の新技術・先端技術関連の工場はありますか。という問いには「なし」と答えている。この地域には、峡南工業団地と身延工業団地があり、地場産業も存在するが、新技術、先端技術関連となると、例えば電子、精密、IT 産業等の工場がないことを意味する。しかし、産業観光となると、必ずしも、新技術や先端技術でなくても良いのであって、地場産業の特出ある技術であり、体験学習ができ、それをするによって大きな満足が得られればよいのである。

この産業観光で大切な質問は、質問 6、質問 7、質問 8、質問 9 である。残念ながら、質問 6 については、1 社もなく、今後の課題として開拓する必要がある。質問 7 と質問 8 の伝統工芸あるいはクラフト関係で活躍している事業所がありますか。また、見学や体験ができますかという問いには、富士川クラフトパーク内で「和紙」製品の製作(西島和紙工房)を行っており、同様に和紙の里でも和紙の製作を見学や体験ができる。



● 富士川クラフトパーク正面

(館内)

- ・ 展示販売場
- ・ 喫茶室
- ・ 富士川ガラス工房（実演見学、体験コース）
- ・ 富士川陶房（創作体験）



● 富士川クラフトパーク内各展示館

- ・ みのぶ館（湯葉実演棟）
- ・ 和紙と歌舞伎の館（手漉き和紙・創作体験）
- ・ 木の館（木工実演・創作体験）
- ・ しもべの館（曲ワッパ実演等）
- ・ 南アルプスの館（硯実演・創作体験）
- ・ 匠の館（印刻実演・創作体験）

質問 9 の特産品はなんですかという問いには、西島和紙（手漉き書道用紙）、曙大豆（曙地区のみで採れる大型大豆）、ゆば、久遠茶（24 種の薬草入り）などがあげられているが、身延町には、この他にも、いくつかの特産品、しいたけ、しいたけ茶、南天のどアメ、南天ワインなどがあり、今後これらの販売を伸ばすためのマーケティング戦略を考えていくべきである。

質問 11 の「まちづくりテーマは(行政の施策方針等)はなんですか」という問いについて「安らぎと 活力ある ひらかれた まちづくり」となっている。あわせて質問 12、質問 13 の観光振興や産業観光の取り組みには、力を入れ取り組んでいきたいと答えており、観光の町 - 身延町への取り組み意欲が感じられる。

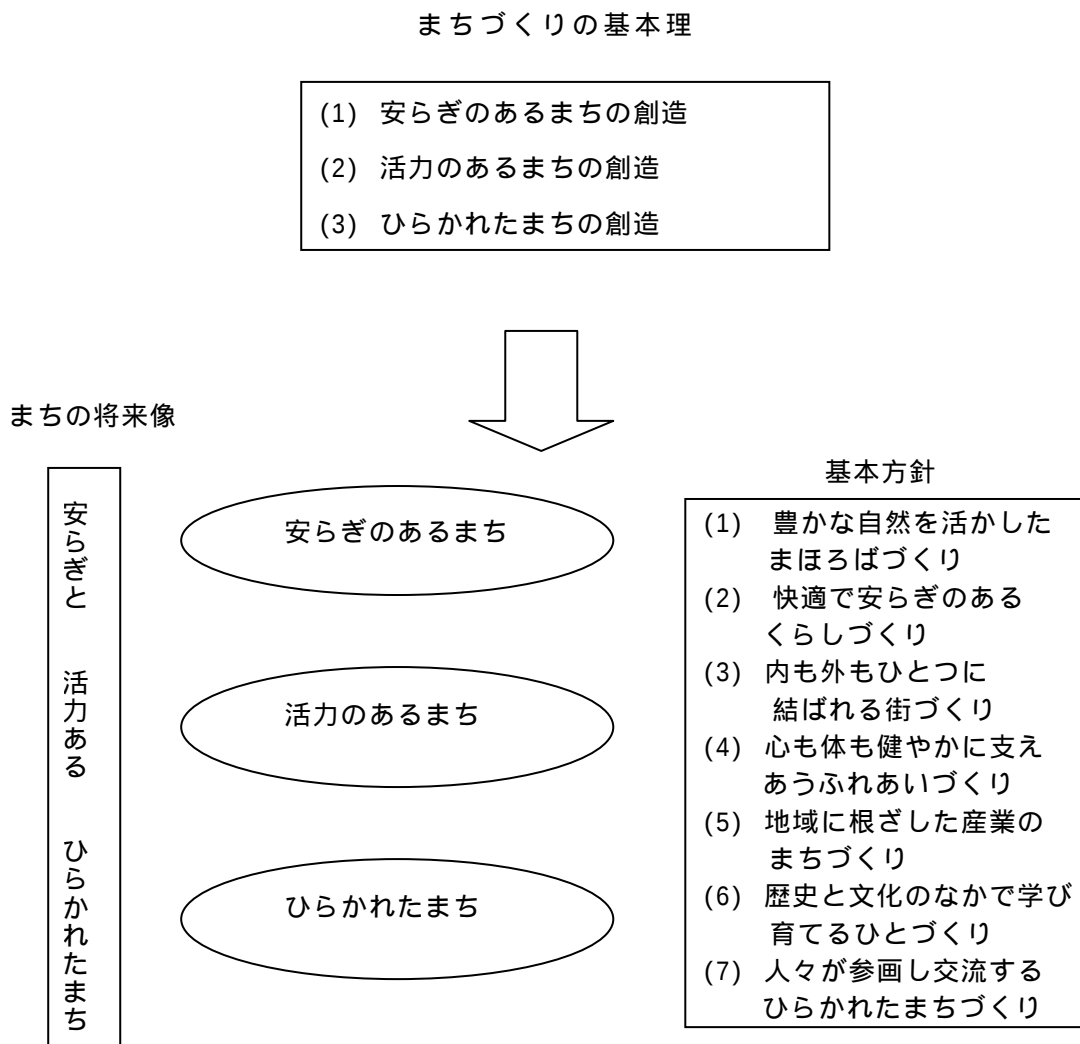
質問 14 の産業観光振興に対する考え、感想では、合併による融合を最大限活用した産業観光の振興を図りたいと答えている。

これは、合併前の平成 16 年 3 月に出された「新町建設計画」のなかで、新町「身延町」の建設、まちづくりの基本理念や基本方針とあわせて、産業観光振興を展開すべきである。

この基本理念や方針から、まちづくりテーマとして、「やすらぎと 活力ある ひらかれたまちづくり」を行政の施策方針としてかかげているので、商工会も町の政策に沿って産業観光を展開すると効果がある。特に、3 つの「創造」がこれからの身延町の活力の源となって、多

くの知恵と関係機関、団体による協力が求められる。

このまちづくりの基本理念に基づき、基本方針は7つから構成されている。これを図式化すると



また、新町建設計画の第6章の新町における山梨県事業の推進の(5)観光の振興では、新町における観光は、峡南地域の地場産業振興機能を伴った観光の発信基地である富士川クラフトパークの活用とともに、各地域の観光施設が連携し、連続性のある一体的な観光事業が展開できるよう、効果的な施策を推進する。

また、本栖湖周辺の県有林を整備した森林文化の森「本栖の森」の有効活用を推進することを記している。

一方、同建設計画の第5章新町施策1の(3)観光の振興では、新町における観光は、富士川クラフトパーク(富士川ふるさと工芸館)・身延山・下部温泉・本栖湖・なかとみ和紙の里など各地域の貴重な観光資源を活用するなかで、広域的な新たな観光ルートの設定や観光ガイド

の養成、各観光施設が連携し連続性のある一体的な観光事業の展開を行うなど、観光産業の振興を図るとしている。

また、観光協会の再編と活性化を図るとともに、観光の通年化と滞在・体験型観光などによる観光環境を目指す。

駐車場の整備、交通規制、情報提供の拡充など観光地の渋滞対策や、トイレや案内板整備などの観光関連施設の充実に努める。

さらに、農林業・観光産業や工芸品・健康食等の異業種間交流を推進し、産業の振興を図っていくとしている。

#### [ 主な施策・事業 ]

- 観光基本計画の策定
- 広域観光ルートの整備
- 認定制度を活用した観光資源のPR
- 観光拠点施設の連携
- 観光協会の体制整備
- 体験型施設の整備充実（ふるさと工芸館・金山博物館・和紙の里・ゆばの里等）
- 観光情報発信拠点の整備（道の駅しもべ・和紙の里・ゆばの里）
- 観光関連施設の整備（駐車場・トイレ・案内所・案内板等）
- 観光拠点の交通渋滞対策
- 異業種間交流などによる産業の振興

等策定している。

#### (4)克服すべき課題

産業観光の理念や概念がいまだはっきりしていないため、したがって、定義もはっきりしていない。そこで、第1章では、あえて大胆に既成概念にとらわれず経済的、社会的にその背景を実証的に考察している。産業観光は、一般には社会見学とか体験学習としての観光旅行といっているものである。

##### 身延イコール身延山久遠寺

通常、身延というとすぐ浮かんでくるのは身延線より、身延山久遠寺である。ここはいわずと知れた日蓮宗総本山身延山久遠寺である。このあまりにも強いイメージが、時によって他のものが表に出にくい傾向がある。これは他のこれといったイメージの乏しい市町村にとってはうらやましい限りであるが、これをいかに克服していくかが、まず、最初の大きな課題である。そのためには、やはり富士山のお膝元本栖湖の景観や健康ブームのなかの癒しとしての下部温泉をもっと前面に出していくべきであるし、また、産業観光にも力を入れていくべきである。

##### 産業観光と富士川クラフトパーク

身延町は、山梨県内の市町村のなかにあって観光資源は比較的多く、ある意味において観光の町といえる。また、産業観光を展開していくために、富士川クラフトパーク（富士川ふるさと工芸館）が町内にあることは、これから産業観光を振興し、展開していくうえで核となる存在である。しかし、身延町のアンケートでは、質問6の地域の企業で、工場見学を実施しているところがありますかの問いに、企業名はあげられていなかった。町内に、富士川クラフトパークをかかえて、地場産業振興の核を持つ中であって、工場見学や体験学習をするところがないのは残念である。これは、今後、行政、観光協会、商工会が協力して、早急に開拓していかなければならない。

#### 和紙の里と周囲事業所との一体的なマーケティング

身延町には和紙の手漉きが体験できる「なかとみ和紙の里」がある。

この和紙の里には、手漉きが体験できる「漉屋なかとみ」のほか、全国の和紙を集め販売もしている「紙屋なかとみ」、工芸美術が中心の「なかとみ現代工芸美術館」。そして、四季の味を楽しめる食事処「味菜庵」の4施設からなっており、1日ないし2日位滞留し体験学習ができる場所である。



（なかとみ和紙の里）

しかし、ここでは、「手漉き和紙特別講座」も開いているが、地元西島では、民間の事業所が7～8軒書道用の和紙等、手漉きや自動化で製造しているが、このような企業や事業所が、当面、工場見学だけでも協力してくれたら、もの作りの実体がわかり理解も深まる。さらに日本伝統の技 - 和紙の里としてのイメージ向上につながる。したがって、早く工場見学に協力してくれる事業所数社を見つけることである。

#### 商店街の活性化

産業観光を積極的に展開していくためには、地場産業の活性化だけではなく、商店街の活性化が、重要である。身延町では、久遠寺山門通り総門内の門内商店街、総門外の梅平商店街、身延駅通りのしょうにん通り商店街がある。これらの商店街は、それぞれ位置的に独立性をもち、商店街間のつながりはあまりない。門内商店街は、身延山久遠寺に参拝にきた人たちに、お土産を売るのが主である。梅平商店街は住民に対して生活必需品を売るのが主であり、しょうにん通り商店街は身延駅前に立地し、高度化事業により古い街並みを再現した商業空間で、それぞれが個性をもっている。したがって、共同でイベントとか、行事をおこなうことが難しい状況にある。しかし、各商店街の個性を活かしつつ、年に2回位、身延山久遠寺関係の行事にあわせて、共通ののぼり旗とかを立て、一体感を示し雰囲気盛り上げることも必要である。

## 産業観光と特産品の開発

産業観光振興にとって、特産品が沢山あることは、強みである。観光客を呼び寄せるだけでは、あまり意味がない。地元特産品を沢山買ってってもらい、お金を落としてもらいたい。この特産品開発においては、健康に良い食べ物や飲み物、縁起の良い置物や身に付けるもの、実用品でアイデア品等に可能性がありそう。また、産学共同での開発も検討の余地があり、また、販売においては、セット販売を考えることも必要だ。

## 産業観光展開と、関係機関・団体の協力

身延町は、旧3町が一昨年合併し、すでに1年3ヶ月がたっており、そろそろ旧3町の総合的な観光振興のための連携、展開を行うため、行政、業界団体、商工会、NPO等が、例えば「産業観光振興連絡会」を作り、積極的に取り組みをしてほしいものである。現在の観光は、一点豪華主義ではなく、関係する名所・旧跡や施設見学・体験学習等をじっくりと計画して旅行する目的志向の傾向にあるため、観光にもストーリーが必要であり、その目的志向に合う観光ルート、メニューを用意する必要がある、この問題を克服することが大切である。

観光メニュー作成にあたっては、例えば

- ・ お寺めぐりコース      ・ 温泉めぐりコース      ・ 施設見学・体験学習コース
  - ・ 里めぐりコース      ・ トレッキングコース      ・ ハイキングコース等いくつかある
- コースに、他の観光資源や祭りなどを組み合わせ、セット別、グループ別、ユニット別にいろいろコーディネートすることが必要である。

## 観光の町、身延町になる

いままで、身延町の観光資源をみてきたが、身延町の観光資源は豊富であり、バラエティにとんでいる。これは町の宝であり、したがって、関係者はもちろん、一般の町民も、身延町は「観光の町」と胸を張っていてもよいのではないかな。

この貴重な観光資源を活かすためには、行政、業界団体、商工会等関係機関はもとより、NPO関係者やボランティア等の協力をえて、観光施設の管理、観光ガイド等をし、無人化している施設のないようにすることは重要である。

とにかく、身延町は、一般の観光にしても産業観光にしても、豊かな観光資源があり、展開のプロデュース次第では大きく飛躍する要素をもっている。それには、観光の町「身延町」を町民とのコンセンサスのもと、前面に打ち出すことが大切であり、関係者はもちろん町民の意識を変え、観光に対する姿勢を変えることが重要と考える。

## 第4章 地域資源タイプ別産業観光の戦略方向性

### —調査研究対象市町をモデルにした産業観光のビジョン—

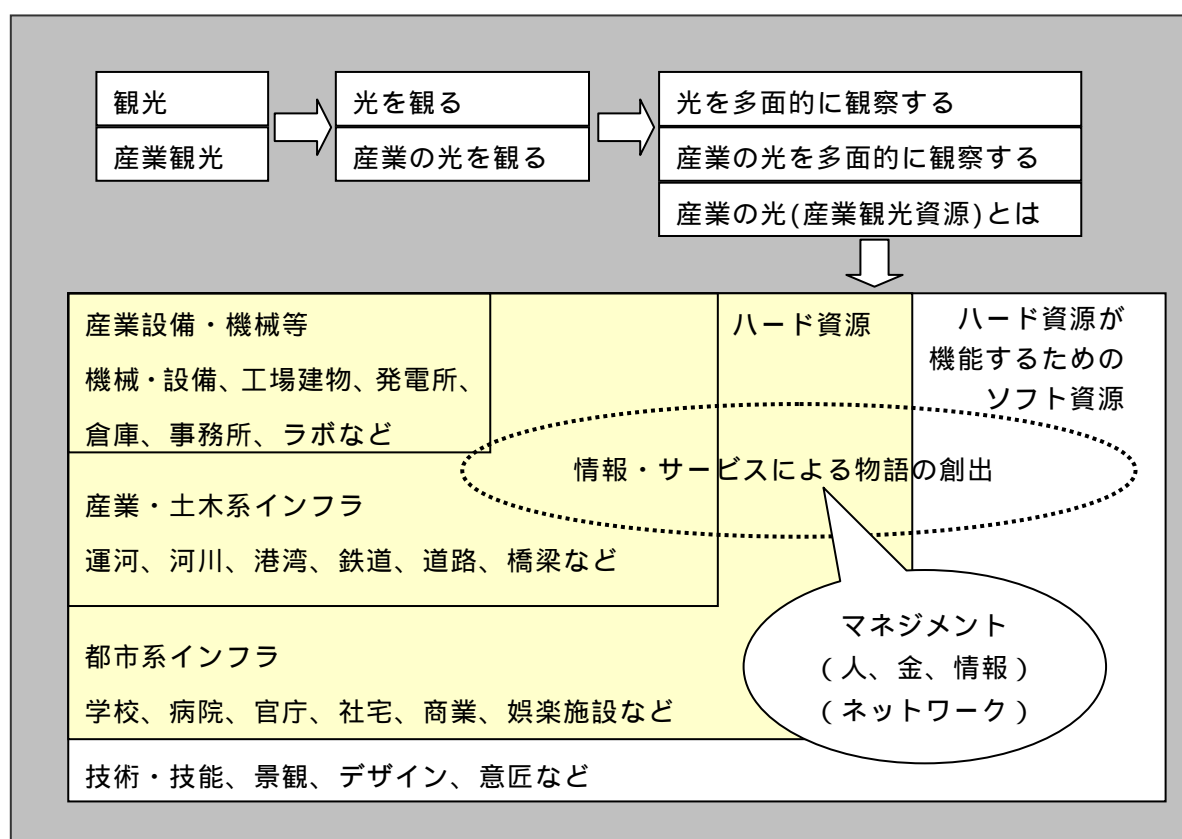
本章では、第1章から3章にわたり、調査・分析した結果に基づいて、調査研究対象市町をモデルにした産業観光のビジョンを提示する。

#### 1. 産業観光の体系

##### (1) 産業観光資源

第1章で産業観光についての定義を試みたが、各地で取り組まれている産業観光の内容を見ると、その概念や手法は未だに確立していない。また、産業観光のビジョンも明確とはいえない。そこで、本調査結果に基づいて、社団法人日本観光協会と財団法人社会経済生産性本部が策定した「産業観光推進会議中間報告(要約版)」(以下、「中間報告」という)を参考にしながら、産業観光の概念について体系的に整理してみる。

「はじめに」に記されているように、観光を文字どおり解釈すれば『光を観る』ことである。観るという字は、見ると看るを組み合わせた字で、その意味は目で見、触って看ということ。物事を多面的に観察するということである。とすれば観光とは、『光を多面的に観察する』こととなる。光とは何か、従来からの観光ではなく産業観光であるから、産業の光、すなわち産業観光資源と捉えるべきであろう。その産業観光資源について中間報告を参考にして図式化してみた。



前頁で図式化した「産業観光資源」を次のように整理すれば、これから産業観光ビジョンを打ち立てようとする地域にどのような「産業観光資源」があるのか一目でわかる。

| 情報・サービス資源(ハード資源とソフト資源をつなげる物語の創出) |                    |
|----------------------------------|--------------------|
|                                  |                    |
|                                  |                    |
| ハード資源(産業系、土木系、都市系等)              | ソフト資源(技術、景観、デザイン等) |

「中間報告」では、言葉で産業観光を「歴史的・文化的価値のある産業文化財(産業遺構)や工場・工房及び産業製品、コンテンツなどのソフト資源を観光資源とする新しい観光形態であり、それらの価値や意味、面白さにふれることにより、人的交流を促進するもの」と定義している。

さらに、次のような特色を挙げている。

○テーマ性・趣味性が強く、知的好奇心を満たす

産業観光は、観光対象自体の特性から、個々人のテーマや趣味、知的好奇心を満たす、いわば「自分磨き」の観光といえる。

○持続可能な地域づくり

産業観光は、受入地域(観光地)が自ら資源を発掘・編集し情報を整理して発信する「地域主導型」の観光である。この結果、産業観光は新たな地域産業の創造を促し、持続的な地域づくりにつながる観光となる。

○見る・学ぶ・体験する三つの要素を備えている

「見る」を中心とする従来型の観光に加えて、産業観光は「学ぶ」「体験する」という三つの要素を全て満たす観光である。

○「ふれあい満足(交流欲求)」を満たす

産業観光は、地域の人々との交流を通じて、顧客の「ふれあい満足(交流欲求)」を満たす観光である。「ふれあい満足(交流欲求)」は単なる受身的な満足(自己欲求を満たす)だけではなく、他者との交流を通じて得られる満足のことである。

「ふれあい満足(交流欲求)」の活動内容としては、次の事例を挙げている。

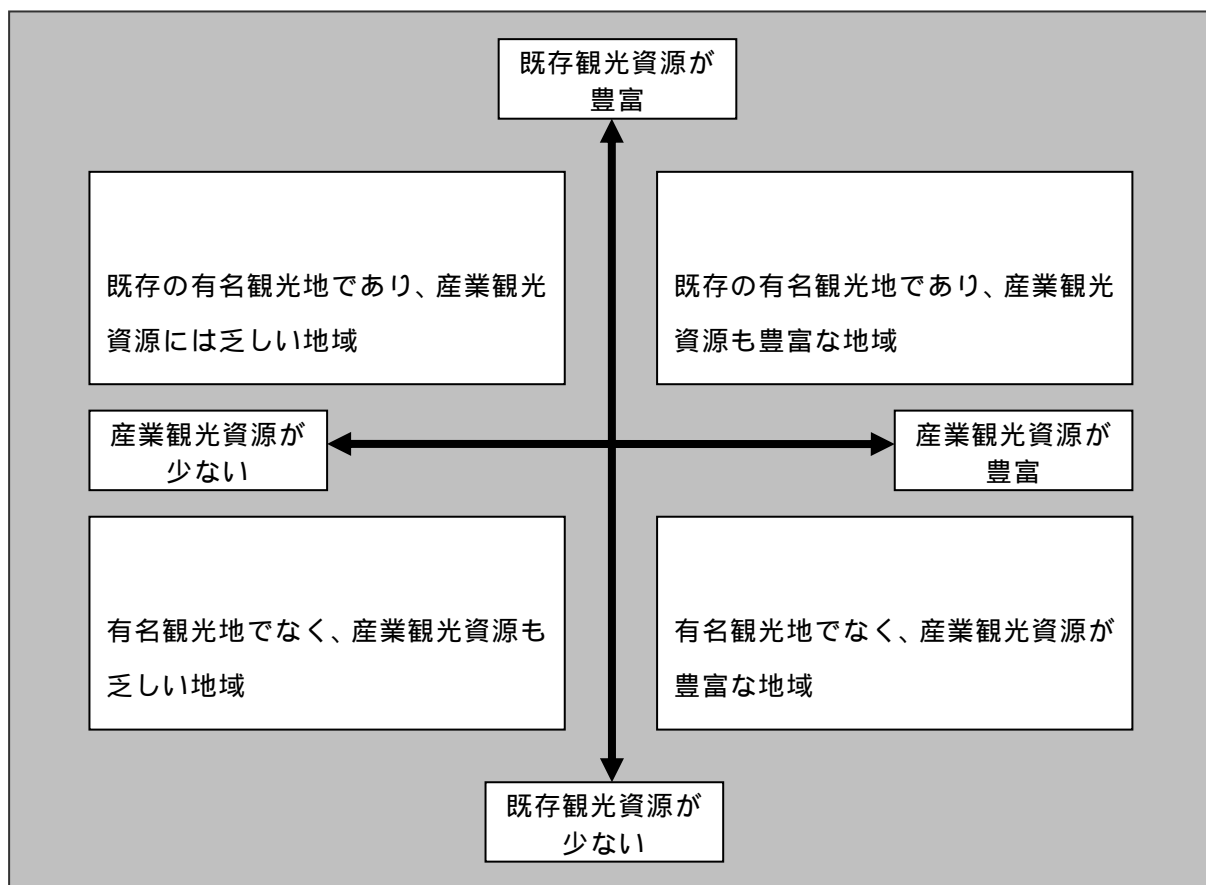
- 案内人・ガイドとの情報交流
- 歴史的建築物などに強い愛着を感じる
- ファンとして何度も訪ねる(リピーター)
- 遺産や里山の保全などに生き甲斐を覚える
- スポーツやゲームなどに勝利する
- 趣味や特技を披露する
- 蘊蓄(うんちく)を傾ける(歴史、産業技術等)

## (2)産業観光ビジョン策定の枠組み

「中間報告」では、産業観光の事業モデルを次のように分類した上で、地域の実態にあった事業の推進を図ることが大切であり、個々の商店と商店街が不可分であるように、個別事業と地域全体の事業の連携・ネットワーク化が重要だと指摘している。

- 個別事例先導型：個別事業の成功がきっかけとなって地域全体に波及(長浜黒壁など)
- ネットワーク型：既存の事業主体が連携・ネットワークして広域事業に展開(名古屋・中部圏)
- 地域主導型：自治体・商工団体・住民等が先導して事業基盤を構築し、その中で個々のビジネスが発展(小樽、門司など)

また、新たに産業観光に取り組む場合、当該地域の既存観光資源や観光に係るインフラの状況を把握するために、既存の観光資源と産業観光資源の二軸で次のような類型化を試みている。



さらに、地域アンケート調査では、産業観光に取り組まない理由の6割が「観光対象となる(産業観光)資源がない」という回答であった。しかし、寂れた商店街が、その懐かしい景観と人の魅力で観光交流空間として再生したり、薄汚れた運河や堀割を再生・修景することにより、優れた観光空間に変身するケースなども少なくないとする。

そして、地域資源の価値をきちんと認識し、これらを磨き、柔軟な発想力で活用を工夫する粘り強い取り組みが重要である。とりわけ、目に見える地域資源の裏側にある物語や人物の魅力、デザイン・意匠といった、目に見えないソフト資源を活用し、ブランド化を図る取り組みなどが

重要となると指摘している。

最後に、産業観光の対象は、従来型の観光では考えられていなかったものが多い。従って、産業観光資源の固有性や特徴を活かすための、着眼点や発想の鋭さ、面白さが問われる。その意味では、観光客だけでなく、地域も「観光する心」を大切にすることが求められる、と結んでいる。

すなわち、「産業の光(産業観光資源)を多角的に観察する」心(姿勢)が大切なのである。

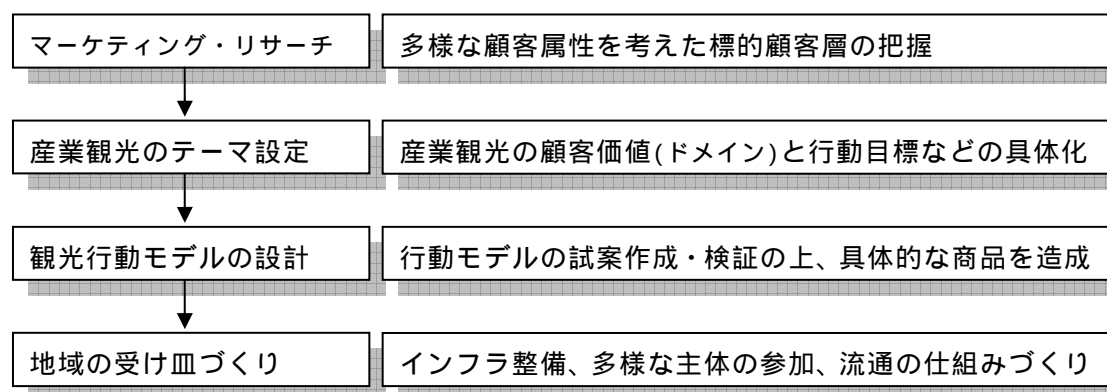
中間報告で指摘されている「目に見えないソフト資源を活用し、ブランド化を図る取り組み」について、財団法人広域関東圏産業活性化センター(GIAC)が策定した「平成16年度南アルプス市地域振興計画策定調査～南アルプス・ブランドの確立による地域活性化に向けて」(以下、「地域ブランド調査」という)を参考に、目に見えないソフト資源を活用するための手法を整理する。

「地域ブランド調査」では、地域の特性を整理する際に、次のような「地域資源チャート」を用いて地域資源を整理している。

|                                                                                        |                                                                                          |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 顕在資源<br>(今後も地域を代表する資源として期待大)<br>地域ブランド体系の中心的な役割を担って<br>いくべき資源                          | 要修正資源<br>(今はいいけれど今後はちょっと心配)<br>資源価値の再構築や運用の再編成などを行<br>うことにより、今後大幅な修正や巻き直しを<br>図っていくべき資源  |
| 潜在資源<br>(素材はいいが今はあまり注目されていない)<br>今は重要な資源として認識されていない<br>が、創造的運用も含め、今後戦略的に活用<br>していくべき資源 | 消失資源<br>(すでに過去の資源となっており今後も望み薄)<br>ブランド価値がすでに消失していたり、地域<br>ブランド体系上の位置づけが困難な状況と<br>なっている資源 |

上記の切り口で、「産業の光(産業観光資源)を多角的に観察する」心(姿勢)をもって、目に見える地域資源の裏側にある物語や人物の魅力、デザイン・意匠といった、目に見えないソフト資源を活用し、ブランド化を図っていくことが、産業観光を進めていく上で極めて重要であろう。

「中間報告」では、産業観光ビジョン策定の手順として、次のようなステップを提示している。



## 2. 本県モデル(調査研究対象市町)の課題

「1. 産業観光の体系」で見た産業観光ビジョン策定にあたっての産業観光資源の抽出と価値創造の手法に基づいて、本調査のモデルとなった三市町における産業観光推進上の課題を抽出する。

### (1) 三市町の産業観光資源

#### 南アルプス市

| 情報・サービス資源(ハード資源とソフト資源をつなげる物語の創出)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域ブランド戦略におけるブランド・コンセプト：南アルプス花桃源郷(はなとうげんきょう) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 極める花桃源郷(登山)</li> <li>・ 癒しと感動の花桃源郷(山岳観光)</li> <li>・ 結ぶ花桃源郷(果の里観光)</li> <li>・ 味わいの花桃源郷(フルーツ・花工特産)</li> </ul> </li> <li>● 産業観光の展開(コミュニティ全体で産業観光に取り組む態勢) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 田園都市にみる生業の姿(クラインガルデンによる都市住民との交流)</li> <li>・ 果樹産業の垂直的統合化 <ul style="list-style-type: none"> <li>農業・観光農園・特産品開発生産・販売のマーケティング戦略の確立</li> <li>食品製造業者・菓子名店のコミット&amp;サポート</li> <li>工場開放による体験・見学</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>・ 産業観光スポットへ誘客するプロモーション <ul style="list-style-type: none"> <li>産業歴史資源探訪への興味づくり</li> <li>伝統工芸産業の灯を守り伝え続ける</li> <li>産業文化遺産のストリート化</li> </ul> </li> </ul> |                                                                                                                    |
| 南アルプス山系(北岳、夜叉神峠等)<br>果樹農園、特産品開発(手作りジャム等)<br>地場産業(甲州鬼面瓦、甲州武者幟・鯉幟等)<br>安藤家住宅の建物と庭園(重要文化財)<br>木の国サイト(山梨県産の木工品の展示や木材産業の拠点)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 十日市(鎌倉時代からの歴史)<br>安藤家住宅の歴史・文化的価値(重要文化財)<br>市名(良好なイメージとカタカナ名を持つ唯一の市なので知名度が高い)<br>甲州鬼面瓦、甲州武者幟・鯉幟の技能<br>武田信玄公の治水利水の歴史 |
| ハード資源(産業系、土木系、都市系等)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | ソフト資源(技術、景観、デザイン等)                                                                                                 |

当市を既存観光資源と産業観光資源の二軸で類型化すると、有名観光地でもなく、産業観光資源も乏しい地域に分類される。しかし、良好なイメージと知名度が高い南アルプス市という市名を有しており、南アルプス山系、果樹農園、安藤家住宅などブランド化を図ることが十分に可能な資源も有していることから、産業観光の試みが成立する可能性は十分にあるものと考えられる。さらに、他に先駆けて地域ブランド戦略に取り組んでいることが当市の強みであろう。

| 情報・サービス資源(ハード資源とソフト資源をつなげる物語の創出)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>●第5次都留市長期総合計画「基本構想(案)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「環境首都つる」を目指したまちづくり <ul style="list-style-type: none"> <li>郷土の歴史、文化の保存・継承</li> </ul> </li> <li>・個性あふれる地域産業を育むまちづくり <ul style="list-style-type: none"> <li>地域資源を活用した「参加・学習・体験都市つる」の推進</li> <li>中央自動車道都留インターチェンジのフルインター化に伴う企業誘致等の推進</li> </ul> </li> <li>・人と自然が共生する環境のまちづくり</li> <li>・あらゆる主体が参画し、協働するまちづくり</li> </ul> </li> <li>●産業観光の展開 <ul style="list-style-type: none"> <li>・城下町としての歴史・文化の物語化(関連付け)</li> <li>・リニアモーターカーの走行実験見学客を市内へ誘導</li> <li>・中心部(旧城下町)と周辺部(自然あふれる空間)の結びつけ</li> <li>・食をテーマとした産業の育成と体験型観光の結びつけ</li> <li>・大学と連携した産業観光の模索</li> </ul> </li> </ul> |                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <p>お城山(勝山城跡、谷村城跡)の存在</p> <p>今も残る城下町の面影</p> <p>ミュージアム都留(八朔祭屋台、飾幕等展示)</p> <p>松尾芭蕉が半年流寓した桃林軒の存在</p> <p>市内各地に点在する寺社、史跡、文化財</p> <p>文化ホール、ふるさと会館等文化施設</p> <p>都留文科大学の存在</p> <p>リニアモーターカーの走行実験施設</p> <p>発電所跡(水路橋)</p> <p>マイクロ水力発電施設</p> <p>農と食と温泉による「和み」空間の整備</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | <p>郡内地域の中心、都心まで近い</p> <p>自然あふれる、水が美味しい、住環境がよい</p> <p>人情が豊かで親切、都心まで近い</p> <p>城下町としての歴史・文化が豊か(甲州谷村城絵図、茶壺道中、郡内織が江戸で流行、松尾芭蕉の蕉風俳句開眼等の伝承がある、葛飾北斎が飾幕の下絵を描いた、小山田氏、浅野氏、秋元氏の存在、郡内の中心地として経済的に繁栄した)</p> <p>教育(大学)のまちというイメージ、学生が人口の一割を占める</p> <p>盛大に開催される八朔祭(大名行列、屋台巡行)</p> |
| ハード資源(産業系、土木系、都市系等)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | ソフト資源(技術、景観、デザイン等)                                                                                                                                                                                                                                             |

当市を既存観光資源と産業観光資源の二軸で類型化すると、有名観光地でもなく、産業観光資源も乏しい地域に分類される。しかし、目玉になる施設(ある意味ではリニアモーターカーの走行実験施設は目玉になるが、産業観光を推進する上では物語を組み立て難い)はないものの、城下町として郡内の中心地として栄えた歴史・文化は奥深く、産業観光の中心テーマになり得ると思う。また、市役所や商工会も産業観光的な取り組みに熱心であることも当市の強みである。

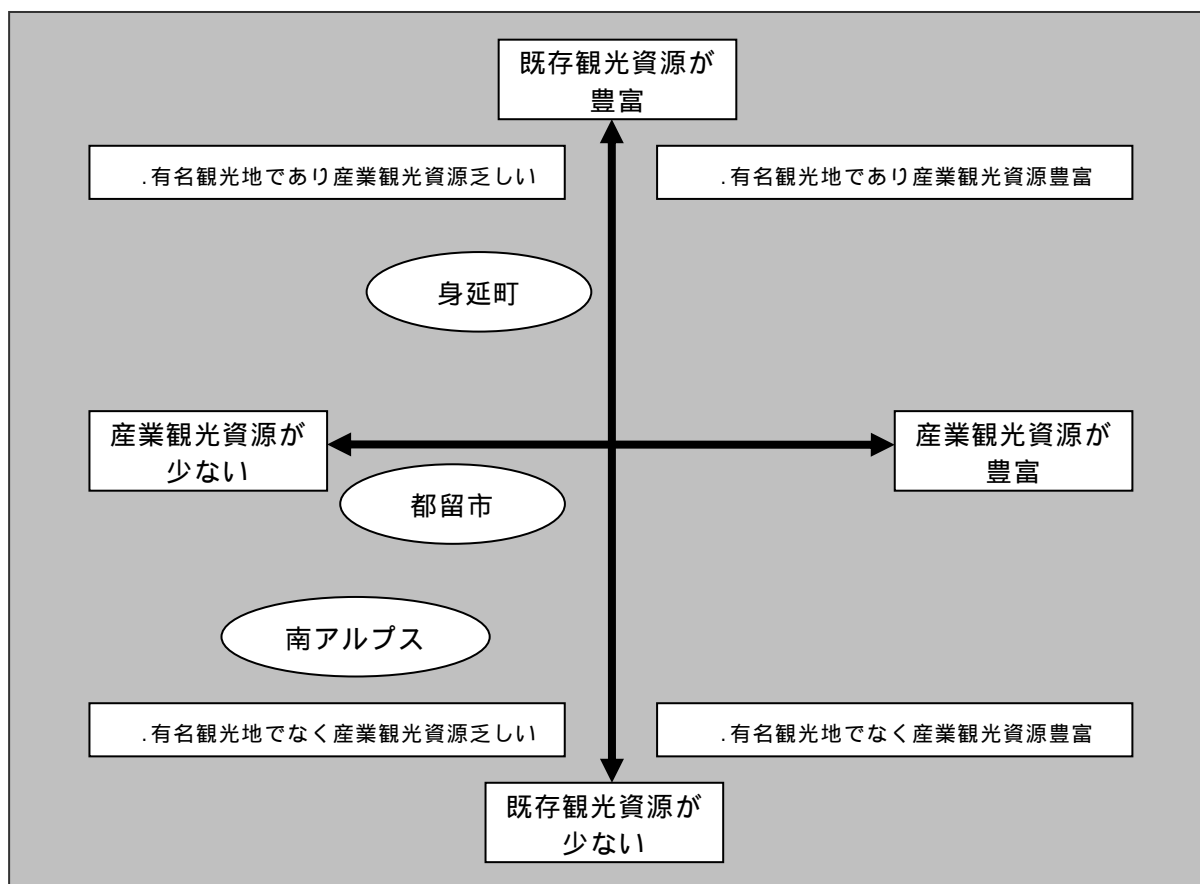
## 身延町

| 情報・サービス資源(ハード資源とソフト資源をつなげる物語の創出)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                          |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>●「新町建設計画(平成 16 年 3 月)」まちづくりの基本理念 <ul style="list-style-type: none"> <li>・安らぎのあるまちの創造</li> <li>・活力のあるまちの創造</li> <li>・ひらかれたまちの創造</li> </ul> </li> </ul> <p>豊かな自然を活かしたまほろばづくり</p> <p>快適で安らぎのあるくらしづくり</p> <p>内も外もひとつに結ばれるまちづくり</p> <p>心も体も健やかに支えあうふれあいづくり</p> <p>地域に根ざした産業のまちづくり</p> <p>歴史と文化のなかで学び育てるひとづくり</p> <p>人々が参画し交流するひらかれたまちづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●産業観光の展開 <ul style="list-style-type: none"> <li>・知名度と集客力が高い「身延山久遠寺」と他の産業観光資源との結びつけ</li> <li>・産業観光の拠点として富士川クラフトパークを活用</li> <li>・和紙の里と周辺事業所が連携して体験学習を促進(協力事業所開拓)</li> <li>・身延駅前しょうにん通り商店街と門内商店街を回遊する仕掛けづくり</li> </ul> </li> </ul> |                                                                                                                                                          |
| 富士川、本栖湖、周辺の山々<br>身延山久遠寺とその周辺の歴史・文化資産<br>下部温泉郷の情緒ある佇まい<br>ホタルの里(下部一色地区)<br>富士川クラフトパーク<br>しょうにん通りの整備された町並み<br>なかとみ和紙の里<br>句碑の里                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 日蓮聖人という歴史上の人物の存在<br>身延山久遠寺の知名度・集客力<br>身延山久遠寺のしだれ桜<br>信玄のかくし湯として有名な下部温泉<br>信玄の経済力を支えた湯の奥金山の歴史<br>西島和紙の歴史、宮沢賢治が訪れた山梨県唯一の地域という歴史、印章の歴史<br>ゆば、南天、竹炭等の特徴ある特産品 |
| ハード資源(産業系、土木系、都市系等)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | ソフト資源(技術、景観、デザイン等)                                                                                                                                       |

当市を既存観光資源と産業観光資源の二軸で類型化すると、身延山という抜群の知名度を誇る有名観光地であるが、産業観光資源としてはやや乏しい地域に分類される。身延山と他の産業観光資源をどのように結びつけるかが大きなテーマであり、その拠点として富士川クラフトパークが想定される。また、商業も産業観光資源の大切な要素であり、身延山久遠寺参拝客が必ず立ち寄る門内商店街から駅前しょうにん通り商店街まで回遊する仕掛けづくりが必要であろう。また、下部温泉郷を活用した長期滞在型の産業観光なども考えられよう。

## (2)三市町の産業観光資源の類型化

本調査のモデルとなった三市町を、先に示した既存の観光資源と産業観光資源の二軸で類型化したところ、次のようなポジショニングとなった。



三市町は該当しなかったが、「.有名観光地であり産業観光資源豊富」に該当する地域は、産業観光を展開していく潜在的な能力が最も高い地域であろう。県内の地域では、旧勝沼町のある「甲州市」や八ヶ岳南麓の「北杜市」などが該当するであろう。三市町では身延町が「.有名観光地であり産業観光資源乏しい」に該当した。このポジションにある地域は既存の観光資源をベースとして産業観光資源とどのように物語化するのがポイントとなろう。身延町以外の県内の地域では、行政主導で観光に力を入れている「富士河口湖町」やバブル時にリゾート地として持て囃された「山中湖村」などが該当するであろう。三市町では都留市と南アルプス市が「.有名観光地でなく産業観光資源乏しい」という最も産業観光を展開していく潜在的な能力が低い地域にポジションした。おそらく、県内に限らず全国のほとんどの地域がこのポジションにあるように思われる。このポジションに該当する地域では前述したように、地域資源の価値をきちんと認識し、これらを磨き、柔軟な発想力で活用を工夫する粘り強い取り組みが重要である。その際、目に見える地域資源の裏側にある物語や人物の魅力、デザイン、意匠といった、目に見えないソフト資源を活用し、ブランド化を図る取り組みが重要である。最後に「.有名観光地でなく産業観光資源豊富」というポジションがある。県内の地域では、産業集積の高い地域、「甲府市」、「玉穂町」、

「田富町」、「上野原町」などが該当するであろう。このポジションにある地域は、産業観光資源をベースとして既存の観光資源とどのように物語化するかがポイントとなろう。

### 3. 産業観光ビジョンの策定に向けて

ここまで、産業観光を展開していく際の枠組みを見てきた。ここから、産業観光を展開していくとする地域が、産業観光ビジョンを策定していく手順について整理する。

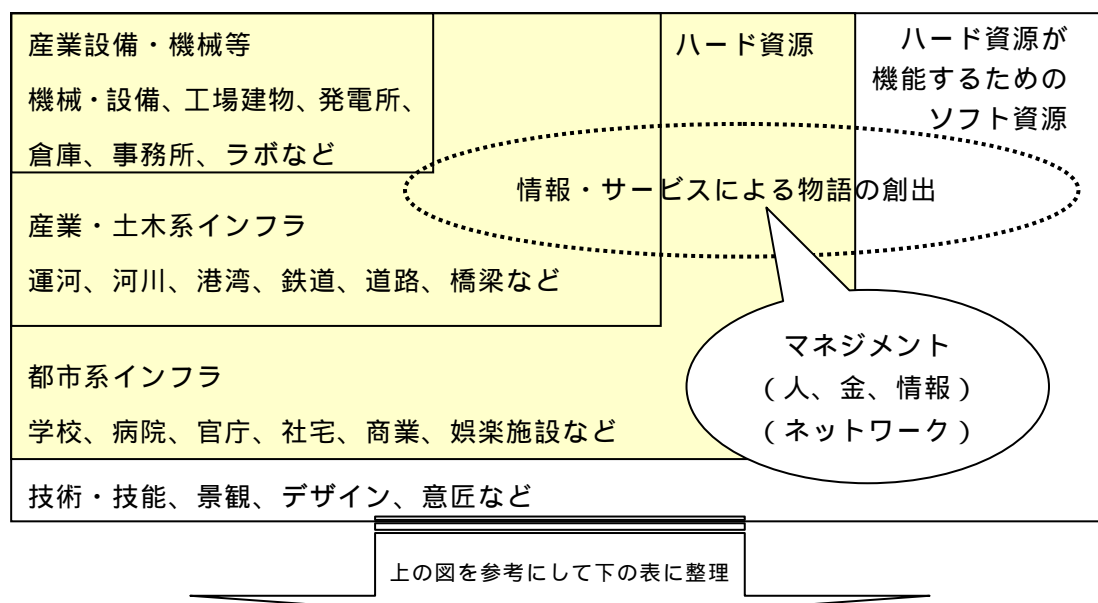
#### (1) 産業観光ビジョン策定の手順

「中間報告」では、産業観光ビジョン策定の手順として、マーケティング・リサーチ、産業観光のテーマ設定、観光行動モデルの設計、地域の受け皿づくり、というステップを示している。このステップは、本格的に産業観光に取り組んでいく段階で必要な手順といえよう。

しかし、本調査を通じて、産業観光に対する考え・感想は多様であり、観光面に重きを置いている商工会、逆に産業面を中心に考えている商工会に二分されている。そこで、産業観光ビジョン策定に向けて、その地域に適した産業観光モデルの捉え方を整理する。

#### 産業観光資源の抽出と整理

まず、その地域にはどのような産業観光資源があるのかを抽出することが必要である。抽出するにあたり、「1. 産業観光の体系」で提示した次の枠組を用いるとわかりやすい。



| 情報・サービス資源(ハード資源とソフト資源をつなげる物語の創出) |                    |
|----------------------------------|--------------------|
|                                  |                    |
|                                  |                    |
| ハード資源(産業系、土木系、都市系等)              | ソフト資源(技術、景観、デザイン等) |

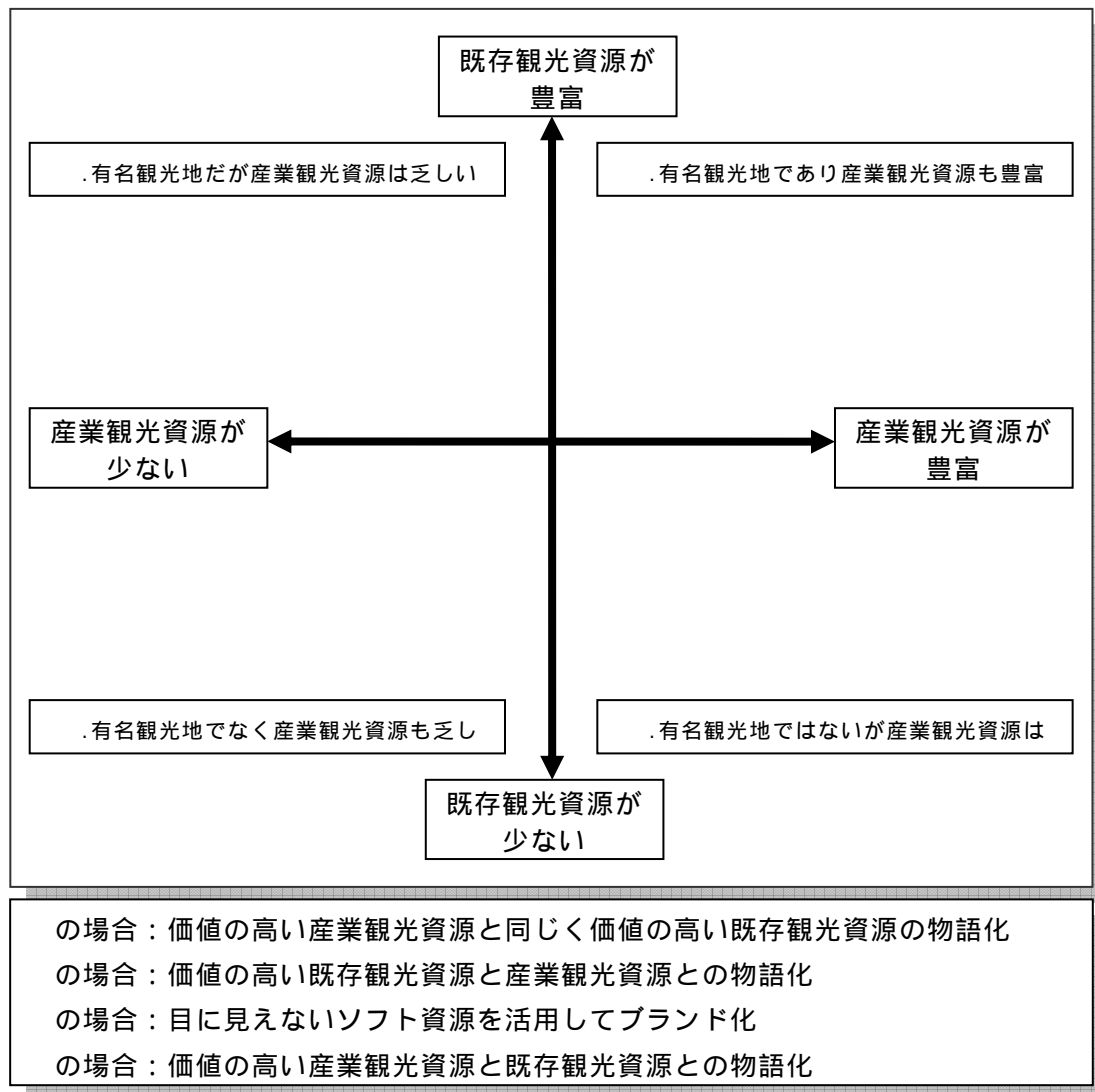
## 産業観光資源の価値認識

次に、抽出した産業観光資源の価値をきちんと認識するために、同じく「1.産業観光の体系」で提示した次の枠組を用いるとわかりやすい。

|                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 顕在資源(産業観光の中心を担う資源) | 要修正資源(資源価値を高めて活用する資源) |
| 潜在資源(戦略的に活用していく資源) | 消失資源(産業観光には活用できない資源)  |

## 地域資源タイプのポジショニング

とにより、産業観光資源を抽出して、その価値を認識した上で「2.本県モデルの課題」で三市町を対象に試みたように、既存の観光資源と産業観光資源の二軸で類型化をして、当該地域が位置するポジションが明らかになれば、産業観光を展開する方向が見えてくるだろう。



## (2)産業観光としての特色づくり

「1.産業観光の体系」で述べたが、産業観光には次のような特色がある。

- テーマ性・趣味性が強く、知的好奇心を満たす
- 持続可能な地域づくり
- 見る・学ぶ・体験する三つの要素を備えている
- 「ふれあい満足(交流欲求)」を満たす

検討している産業観光の内容が、上記の産業観光の特色を満たしているかどうかを確認するために次の枠組みを用いて整理するとわかりやすい。

|                                                                                 |              |            |
|---------------------------------------------------------------------------------|--------------|------------|
| 産業観光の基本理念が、テーマ性・趣味性・知的好奇心を満たすものであるか(下欄に整理)                                      |              |            |
|                                                                                 |              |            |
| 見る要素のある資源は何か                                                                    | 学ぶ要素のある資源は何か | 体験できる資源は何か |
|                                                                                 |              |            |
| 「ふれあい満足(交流欲求)」を満たす活動を取り入れているか(下欄に整理)<br>(案内人との情報交換、歴史的建物に感じる愛情、ファンになる、生き甲斐になる等) |              |            |
|                                                                                 |              |            |
| 持続可能な地域づくりを実現する組織や運営をどうするか(下欄に整理)                                               |              |            |
| 事例 ● 個別事例先導型：個別事業を成功させ地域全体に広げていく(長浜黒壁等)                                         |              |            |
| ● ネットワーク型：既存の事業主体が連携して広域事業に展開していく(名古屋等)                                         |              |            |
| ● 地域主導型：自治体・商工団体等が先導して基盤を構築して展開していく(小樽等)                                        |              |            |
|                                                                                 |              |            |
| その他必要事項の整理                                                                      |              |            |
|                                                                                 |              |            |

## お わ り に

今回、山梨県支部で採り上げた調査研究テーマは、これまでの観光のパラダイムに産業面の資源を加えようとする『産業観光』とした。本文でも再三述べてきたのであるが、産業観光のとらえ方は、広義あるいは狭義に解釈されることによりマチマチあると言える。

このような前提を踏まえ、まずは、第1章で産業観光が注目されつつある背景を探り、その定義を規定することにより3市町の調査分析を進め、市町村地域別の地域資源の態様から産業観光面から見た地域活性化策を描こうと考えた。そして、産業観光についての捉え方が多様である中で、論点の絞り込みの必要性から産業観光を推し進めている「(社)日本観光協会」および「(財)社会経済生産性本部」のレポート等をナビゲーターとしつつ、従来の観光資源との有機的マッチングを試みた。

稿を脱して振り返ると、少々主観性のバイアスがかかってしまった気がする。とりわけ、第1章における産業観光の定義づけは、高覧いただいた関係各位からの評価が分かれるのではないかと考えている。また、産業観光を推し進め地域資源を集約して、ひとつのコンセプトにまとめ上げる地域ブランド化への道筋までは、論が及ばなかったのではないかと顧みている。

最終章では、産業観光による地域活性化の可能性を、観光・産業両面の2軸を使い類型化したわけであるが、別の視点や切り口で産業観光および地域活性化の戦略の方向性を探ることは可能であると思う。

すでに山梨県において、地場産業であるジュエリー業界が進めている『ジュエリーファクトリーセール』や甲州市の勝沼町を中心にしたワイナリー見学は、産業観光の先駆けである。産業観光の具体的な展開イメージとして、参考にするべきであろう。

これらの先行事例とともに、当調査研究の報告書を足がかりにして、商工指導団体等が産業観光に関する調査研究やこれに関する事業の取り組みを行うよう期待したい。また、われわれ中小企業診断士にあっては、産業観光について更に考察を進め、知見を高めたいと考えている。

最後に、当調査研究に対し、資料の提供、調査の調整等全面的な協力をいただいた山梨県商工会連合会並びに南アルプス市、都留市、身延町3商工会には、厚く感謝を申し述べたい。

(社)中小企業診断協会山梨県支部

調査研究事業委員会

土橋 登(執筆・・・1章、3章3)

丸山 孝雄(執筆・・・2章、3章1、はじめに、おわりに)

白倉 信司(執筆・・・3章2、4章)